翻刻

埋木(うもれぎ)の花(はな)

（高崎正風編）

解題　高崎正風編、宮内省蔵版、明治九年九月刻、全二巻（上巻七七丁、下巻五九丁）。縦二六・四糎、横一九・一糎。東北・北海道巡幸（同年六月二日～七月二十一日）の際、沿道の国民が献上した詩歌・俳句・祝辞などを集録。例えば『明治天皇紀 第三』（宮内庁編・吉川弘文館・昭和四十四年）明治九年六月十一日条に、「今次巡幸に際し、沿道人民の詩歌を上る頗る多く、或は行在所・御小休所等の長押・御卓上等に密かに之れを置きて天覧に入られんことを希ひ、或は侍臣等の目に触るべき所に故らに遺棄して拾収せられんことを欲する者あり、是れ農民等、其の身の卑賤なるを思ひ、公然地方長官を経て上るとも其の受理せらるべきを憂ひてなり、是等詠進の詩歌は、巡幸中御歌掛を命ぜられし侍従番長高崎正風悉く之れを整理して、御晩餐の際叡覧に供するを例とす」とある。これは栃木県早乙女村（現さくら市）で農民が「ありがたきみゆきおろがみ立帰り稲を作りて御世につかへむ」という歌を奉ろうとした事件に関連した記事だが、『埋木廼花』（上巻）には詠進者の氏名やより詳しい情景も記録されている。還幸後、高崎は「歌は人情風俗の写真」であるから、巡幸の思い出および「上下の情実互に通ひ親しまるる一端」になるよう歌文集を編纂し、「例なき行幸の大御光に、人しれぬ言葉の花の匂ひ出たつるになぞらへ」、『埋木廼花』と題して献上することにした（序文）。行程にそって埼玉県・栃木県・福島県・宮城県（上巻）、岩手県・青森県・箱館（下巻）の順に収め、詠進者は地方官吏や神官・教導職・教員（含雇外国人）・生徒・農民・商人など多彩にわたる。下巻に供奉員・側近の詩歌を附録し、跋文は近藤芳樹が著している。高崎正風（一八三六～一九一二）は天保七年七月二十八日、薩摩藩士高崎温恭の長男として鹿児島郡川上村（現鹿児島市）に生まれ、同郷の桂園派歌人・八田知紀に和歌を学んだ。明治四年十一月左院少議官・理事官、五年一月より翌年九月にかけて欧米諸国を視察。八年四月宮内省侍従番長を拝命。九年五月御歌掛兼勤となり、十九年二月御歌掛長、二十一年六月より四十五年二月二十八日に死去（七十七歳）するまで御歌所長を勤め、この間に國學院長（初代）や枢密顧問官などを歴任した。また、明治天皇より全幅の信頼を賜って、御製の多くを点じた（高崎については千葉胤明『明治天皇御製謹話』大日本雄弁会講談社・昭和十三年、渡辺幾治郎『明治天皇の聖徳 重臣』千倉書房・昭和十六年、昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第十二巻』昭和女子大学光葉会・昭和三十四年、北里闌『高崎正風先生御伝記』啓文社印刷工業・昭和三十四年、木俣修「高崎正風」明治神宮編『明治の歌人』短歌新聞社・昭和四十四年、清水勝「桂園派歌人八田知紀と高崎正風」『鹿児島女子大学研究紀要』一八―二・平成九年三月、阿部美哉「高崎正風」國學院大學日本文化研究所編刊『國學院黎明期の群像』平成十年などを参照）。なお『埋木廼花』は既刊の地方巡幸関係の資料集（吉野作造編『明治文化全集第一巻 皇室篇』日本評論社・昭和二年、星野武男編『明治天皇行幸史録』潮書房・昭和六年、我部政男他編『太政官期地方巡幸史料集成 全二十四巻』柏書房・平成九年～十一年など）に未収録の文献である。

凡例　一、底本は明治神宮所蔵本によった。
二、字体は原則として通行のものに改めたが、特定の漢字については原文の字体を使用した。
三、仮名遣・振仮名は原文通りだが、濁点を加えた。
四、翻刻にあたり岸川雅範（神田神社）・佐藤一伯（明治神宮）・髙山瑠里（武蔵野大学）・宮本誉士（國學院大學）諸氏の協力を得た。

埋木の花序

吾天皇大御代しろしめし給ひて天下の大政代を古に復させ給ひしより以来、深く世の情形を察し今に適へるを存してふさはしからぬを省き広く地球の大勢を慮らせ給ひ、外邦の長きをとりて自国の短を補ひ万機の御政一日も怠たせ給はず、さても九重の玉座に安居し給はで往年は海路より不知火の筑紫の涯まて行幸し給ひ、ことしは陸路より玉鉾のみちの奥まで御車をめぐらし給ひて、専ら民間の疾苦をとひ千早振神の社に幣帛奉し忠孝節烈の男女を旌賞し耆寿善行の者に物かつげ或は物産の蕃殖をすすめ或は学校の教育を励し給ひなど、残るくまなく宸襟を尽させ給ひしかば、其至誠おのづから万民の心にや貫徹けむ。御車の往過る所野となく山となく老を扶け幼を抱き所せきまて群集て拝み敬ひ奉るさま、幼児の父母を慕ふに異ならず。さる中には流石に心あるも少からで、筑波山によそへて聖恩のかげを仰ぎ、阿武隈川をひきて濁なき御代をたたへ、或は不忘山の忘れがたく信夫の里の忍ばしく思ひ奉る心々を歌に述べ文に著して献れるが、みちみちいとおほかりけるを、正風辱くも御側に侍らひ叡慮の下情を察に切なることを窺ひ奉り、且詠歌の事うけたまはりものすれば捧まつるまにまに一ひらもおとさず御覧を供せさせ奉りき。かくて東京に還幸給ひて後に思へらく、名ぐはしき海や山や城の址関の余波など珍らしき所々をば写真師におほせて其真景を写さしめ給ひつれど、ひとりめみにええぬ人情と形なき風俗とをいかがはせむ。これが姿をうつしこれが影をとどむるものはやがて歌ならずや。されば歌は人情風俗の写真ともいふべきものにしあれば、いかでこたび献れるかぎりを一さらに纂めものして御側に捧げ置なば、万機の御暇あらん折々に彼写真とならべみそなはさんには猶其各地を巡幸ます御心地やし給はむ。はた歌奉りけむ人々はおのが心をして常に九重の雲上に侍らはしむるに等しければ、いか計か嬉しみかしこみ奉らむ。さあらんには上下の情実互に通ひ親しまるる一端ともなりなんと、頓て其よし聞え上て許可を蒙り職務のいとまいとまにかくあつめ叙て二巻となし埋木の花と名づけて献りぬ。さるは宮城の行宮におはしましける時、埋木もて作れる何くれの物ども御覧ぜさせ給へる折御前に侍らひて、「陸奥のあぶくま川のうもれ木の花さく御代もあれば有けり」と思ひつづけしを、やがて此陸奥人のかかる盛世に遭遇て往古より例なき行幸の大御光に、人しれぬ言葉の花の世に匂ひ出たつるにてなぞらへつる也けり。そもそも歌は時に臨み物にふれて、おのかじし心に思ふことを見るもの聞ものにつけてうたひ出るそぞろ言なれば、もとよりみちみちしき政教などに並べいふべきものならねど佗よりこれをみる時は流石に人情風俗の写真にしていみじき裨益おほかるものにしあれば、往古より言囀ぐ支那国には詩を書礼楽と叙たたへて其道のいとも尊きをしへ草とは摘はやせり。我大御国は上代より言痛く言挙せぬ国質にしあれば、御代々々の勅撰或は先哲の家集の類、くれ竹のよよに聞ゆるが浜の真砂の数おほかれど、さるかたに用ゐられしことはなかりき。ただ其精神の折にふれ事に感て黙止あへず発出る嗟歎の声音にしあれば、聴者の心を感動し男女の中を和らげ猛きもののふのこころを慰むるなど隠然政化の補助となりしことも、かき数へんにもたどたどしきまでになむ。されどくだりての世には謂てふものを一の玩弄物と思ひ謬り、且題詠てふことの起りしよりしらずしらず実をはなれて虚をさぐり本をわすれて末にはしり、つとめて人の耳を驚さむとする流弊出来て、いやおとろへにおとろへ行てまことの歌はほとほと地をはらふにいたれり。近代に至りてやうやう紀の河上にさかのぼり、高円山の奥を尋ぬる人々踵起りて此みちのしるべせしより天のしたの歌

の体ややあらたまり行しかども、久方の雲のうへはかへりて天の河霧たち隔て、さる風の吹通はざりしを、今の大御代となりてもろもろの事をすて給はぬあまりに歌の道をもおこし給はむとて、其家とたておかれしを廃止られ此ことに秀たる人々を挙もちゐ給ひ、はた花の願月の夜はさら也折にふれ時につけつつ侍らふ人々に勅題を賜り、としとしの御会始にはあまねく御題を告しめして天の下の歌をさへめして見そなはすこととはなりにたり。されど楢彼流弊をまぬかれずしてまことの言の葉すくなければ、さかしおろかなりとしろしめす料にはいかがあらむ。しかるに此集はしも野の末山の奥にすめる賤男賤女のよめるがおほかれば更に難波津のよしあしを論らふべきにあらねど、上古より例なき行幸まちえてうとむげの花浮木の亀にもたくへつべき嬉しさを、秘あへずうたひうたひ出ししものなれば、尋常のつくりかざれらむ心詞にははるかに勝りぬべければ、ただに陸奥のひなぶり也とみすてあなづるべきにはあらじと思ふよしを、安積の沼のあさかにも憚の関のはばかりをかへり見で、かいしるせるになむ。

明治九年九月　　侍従番長高崎正風

凡例

一　此集編纂の主旨は専らこたび行幸あらせられしそぞろそぞろの民情を折にふれておほし出させ給はむ料にそなへ奉る心しらひなれば、詩歌は更なり祝詞あるは誹諧発句などもまじれるを一つらに書つめて、固りよしあしをもえらばず次席をもたらさずしどけなく物しつる、これこの集の体裁なり。みむ人撰集と同視して其みだりがはしきをとがむる事なかれ。

一　県々の次でをたてて物しつれば其県内なる宿駅の次でをも正してかかまほしけれど、あるは甲の村の人乙の村にて奉りあるは丙駅の人丁駅にて奉り県官につきてささげたるあり、供奉の官員によりて出せるありてことごとしく正すによしなければ唯大方についておきつるなり。

一　東京より人々のよみておこせし歌どもはこの集に省くべけれど、行宮にて御覧ぜさせ奉りしが故に併せて記しおきぬ。其ことわりはその処の左注にいへり。

一　凡人民より奉りしものは俗言蕪辞をも捨させ給はず悉く御覧ぜさせ給ひし御心おきてにならひて、いとかたわなるをもそのままにかけ置ぬ。ただし「てにをは」のいたく差へる或は語路のとほらざるなどいささか添削を加へたるもあるはやむごとを得ざるわざ成けり。

一　おのれ詩を解せず。故に友人の詩をよくするものにつきて韻字平仄などのいたき誤りをば正し改めたるもあれど、作者の本意を失ふにいたらんものはさながらさしおきぬ。

一　同じ人数首の歌奉りし中にことの心またく同じ筋なるは勝れたるを一二首挙て其他は省き、又題詠の歌を奉りしなどはことがらのよせあるをあげて其余はのぞきつ。

一　作者の同じきは歌ことに名をあげぬ例しにならひて、長歌短哥詩祝詞とも同じ人のなるははじめに其名をあげてつぎつぎはみな省きつ。

一　詞書に行幸を祝ひ奉るあるは東幸を拝み奉りて云々などあるとて同じ筋なるは、うるさければそのはじめの哥の前に記して次なるは皆省けり。

一　真名字もてかきし歌どもは仮名字にあらためず其原書に従ひて記しつ。こはいささか其人の学力をもみるにたるべければなり。

一 行幸にあづからぬ旧詠をしるして奉れるは此集に省くべけれど、作者の深き心よせありて奉れりとおぼゆるふしもなきにしあらねばあはせて記しおきつ。

一 すべて勝れてめでたきこと、はた故よしあることどもにて後みむ人のいぶかしみ思ふべきふしぶしあるをばこと更に左注を加へて其のよしをことわりおきつ。

一 狂歌あるは誹諧発句などいとおさなきは更なり、其他無下に鄙俗の詞もて書つけ本末とほらぬことどももあなれど、是らは殊更に加損せざるは其人の真情経行なる本色を失はじとてなり。

一 甲県の人乙県に寄留し又は故ありて他の県にて奉れるものあり。是らはやがて其県の歌に出して其人の本籍をしるす。

一 此集中物に書てささげ奉りしにはあらで、おもと人らのききき伝へてきこえあげしをも併せて記しおきぬ。

一 学校の教官生徒の階級は官名にあらざれども暫く官名に准して姓名の上に加へ、族籍は姓名の下に記しその老と幼とのよはひを記して出せるはこの下に記す。

一 族籍の精粗ひとしからざるは原書によりてしるせればなり。

一 原書に名のみ記して族籍をしるさずあるは、名をさへしるさでいづこにて出せりともわかぬかぎりは併せて附録の部に出せり。

一 宮城県の部に出せる陸奥山にここがね花さくとあるは金花山をさしてよめりとおぼして、壺碑は多賀城の碑を誤読しつらんとおぼゆれどいづれも題詠のうたなれば強てとがむべきにあらず。かかるたぐひをつばらに記さばなほあまたあるべけれどそれらはこの集の要旨にあづからざればさておきぬ。

埋木廼花巻之上

埼玉県

東の国に行幸ありけるをことほぎ奉りて

氷川神社大宮司兼権大教正　平山省齋

天雲のたなびくきはみ大君の恵みの露のかかる御世かな

氷川の御やしろに勅使賜はりければ

雨露もいとはで民をめぐみます大みこころを神や守らむ

洋々皇化八洲中、昨日西巡今日東、汀柳野梅皆自得、江山無處不春風、

行幸を拝み奉りて　伊藤猪助　草加駅

大君の恵みの露はみちのくの国の果までみちわたるらん

開けゆくみよの光りは大君のみゆきの旗の色にみえつつ

八幡神官　春日部春純　粕壁駅

内日さす宮にのみます大みまに心してふけ外の濱風

郷社祠官　藤波重好

開けゆく御代にあはずばみちのくのみゆきをいかでけふをがまましし

心あらばなびきふしてぞ仰ぐべきかかるみゆきの道の草木も

副区長　藤波小彌太

ひらけゆくみよの光りもみちのくのみちわたるらむけふのみゆきに

天地の開けはじめし神代より例しもあらじかかるみゆきは

行幸のをりに小雨ふり出ければ　埼玉県十四等出仕　勝野秀雄

大御さきふり清めてやむら雨もけふのみゆきを空に待らむ

栃木県

むつの国々大行幸まします大みよそひを拝み

たてまつりてよめる

中野千族　宇都宮

高光る御かげかしこみあふぐかなみは下つきの民草にして

へだてなき大みめぐみもみちのくや鄙の隈までもれぬみゆきに

田中露醉　同上

かしこさの泪ぞおつる大行幸てる日を近くあふぐ袂に

くまぞなきみちのおくまでいでましの大み光りのやましわかねば

農業を勤暮けるに今年天子奥羽へ御巡幸に相成今日当地へ御着輦と承り急歩して拝み奉るとて

見目豊次　那須郡中井上村農

ありがたきみゆきをろがみ立帰り稲を作りて御世につかへむ

此うたは下野国塩谷郡早乙女村のあたりにて子を背負ひたる賤の男が、ふみめく物をささげて御車のあたり近くすすみよりけるを護衛の騎兵これをとどめければ、後騎なる宮内大丞香川敬三の馬前にいたりてこれはやつがれがよめるうたに侍り、願はくは御前に奉らせたまへといとまめやかに申ければ、敬みこれをとりて後に御前にささげ奉りけるなり。

謹慎てわが天皇陸奥へ行幸ましましけるを祝ひ奉る

藤田一郎　塩谷郡宇都野村平民

高光る、吾大君は、賢くも、聖にませば、こぬたびは、国みせむとて、九重の都を立て、陸奥へさしていでます、み心を仰ぎまつれば、かしこしや、遠つ御祖の、大きみの、御裔嗣して、一統に、今天下、知食、君か仁は、海原の、波のはてまで、足引の、山の奥まで、民草に、湿わたり、今日はしも、ふせ屋に住る、賤の男も、野のべにあそぶ、賤の女も、手引袖援、足きそひ、大御車の、前後へ、畏み奉り、拝みて、君か御稜威は、甚長く、あぶくま川の、絶まなく、末の松山、浪の外の、とねよの国も、仰ぎ奉らむ、

反歌

高光る吾大君の大御威とねとよの国も照渡るはや

副区長臣　矢板　武

栃木管下第三大区三小区副区長、臣矢板武区内人民ニ代リ、謹テ巡幸ヲ奉祝ス、夫関東ノ極裔、東野ノ僻陬、建立以来未タ曾テ巡視ノ幸アラザルモノ茲ニ二千五百三十年父老空ク翻鸞ノ風采ヲ景慕シ、閭閻但ニ飛龍ノ流光ヲ想望スルノミ、今ヤ英明仁徳ナル皇帝陛下赤子ノ痴情ヲ察シ、黔首ノ愚衷ヲ憐ミ、忽チ未有ノ盛典ヲ起シ、以テ無前ノ鴻恩ヲ敷ク、斯レ実ニ万民ノ望、衆庶ノ願、闔郷挙テ抃舞ニ堪ヘサルナリ、臣武等、職通暢ニアリ、傍観シテ止ヘカラズ、謹テ奉表ス、庶ハ奏聞ヲ経ヨ、

古郷なる二荒の山に御幸ありときき侍りて

村上信夫

皇の恵みも高きふたら山ふた心なくあふくたみくさ

古さとにみゆきと侍し嬉しさになきたらちねぞいとど恋しき

鳳輦を拝み奉りて

嬉しさは雲ゐにのぼるこちちしつ天津ひかげを近くあふけば

行幸のかしこさに

大久保忠恕

ふたふしの稲も何せむ明らけくゆたかなる代のけふのみゆきは

なすの原しげる夏草御車の駒の秣となるがかしこさ

日光御駐輦のをり東照宮へ勅書ありしときき侍りて

東照る神のまことを皇のしろしめしてやくるまよせけむ

龍駕駸々壮又壮、如天仁意満邉彊、小臣殊有感恩涙、踏嶮鸞輿到

日光、

鮎瀬淳一郎

吹風もみゆきの跡をしたふらむあくるみはたをひる返しつつ
南より北に啼ゆく郭公かかるみゆきのみちしるべして

川島耕馬

錦旗閃處草依々、松籟拂塵萬里揮、仰視奈須郊野上、六龍鳳輦聳雲飛、
千早振神代もきかず玉くしげふたらの山にかかるみゆきは
思ひきやあられのみふるなすの野の小笹が原にみゆきせんとは
御車をとどめまほしき初みゆきあらののさとに一ふしのまも
みぐるまは都大路にかへすとも毛野の深草忘れ玉ふな

六月六日日光山にて　講義　奥野安行（日光山）

天皇のみゆきましますけふよりは日の光るてふなさへしるしも

作者未詳

嬉しさやゐながらをがむ初日の出
飛るがへす風も尊とし桐の花

これは今市駅に御小憩ある時おまし所のしきものの下にさしいれて有ける、雑掌三沢為質がもて参りけるをおもと人らとりて御覧ぜさせ奉りけるなり。

恭賦奉祝聖上東幸　三田稱平（那須郡八塩村）

天顔咫尺不垂幃、一豫一遊載錦旅、豈翅仁風偏民庶、無邉草木發光輝、

福島県

今茲明治九年六月、聖上将巡幸奥羽地方、駐蹕於福島、洵爲無前之盛事矣、臣備員教官、因率生徒、奉迎路傍、無任欣抃踴躍之至、謹賦鄙詩一闋敢上　学校訓導　堀江半峰

朱夏正天晴、鑾輿発帝京、宸遊非好事、聖意在安氓、鼓樂君臣悦、壺漿父老迎、山川驅瘴癘、草木被光栄、幸際風雲改、具瞻日月明、謳歌無遠邇、咸願勒鴻名、

奉迎鸞輿歌二首　郷社祠掌　仁科平三郎

迦賀那部而行幸待計武邇比婆理能都久波高嶺毛因而仕邉津
ふりおけるかしらの雪も消ぬべしま近くてらす天津光りに

糠澤直之充（安達郡本宮村平民）

おしなべて道のほとりの山もみなびきふすらんみゆきをがむと
天ざかるひなの長路の出ましを我家の前にをがむかしこさ

本宮村糠沢市郎治かもたる地なる雷神の社のほとりの清水を大みもひにめされしことを嬉しくかしこく思ひ奉りてよめる

大君にわきてつかふる真しみづのそこをおもへばたふとかりけり

このうたは此男本宮村より二本松駅まで道のほどおよそ二里ばかりがあひだ御車の跡をおひてはせきたり近藤芳樹のもとにいたり、いかで此うたを御覧ぜさせ奉らんとてここまでもて参れるなり。願はくばささげ奉らせたまはれといひけるをりしも正風そこにいきあはせてありければよし樹いへらく、此高崎ぬしなん、常に御かたいらにおはしてかかる事すべてあつかひものし給へれば、ただちにねぎきこえてんといひて、やがてさし出しけるをおのれとりあげてこはかならず御覧ぜさせ奉りてんといひければ、其男こよなうよろこびてさあらんにはやつがれが生涯の雲みはまたくたりぬとなんいひて帰りける。

奉迎巡幸詠歌三首并陸奥風三首

菊田和平

宿ごとにささぐるはたのなびくにも君がみいつの風はみえけり
万代に御世安かれといはふのみひなもかはらぬことぐさにして
山川の神もよりてやつかふらん君がみゆきの大路やすけし
いとなきは更にもいはじ物いむと帯だにとかでこがひするみは
かひこかふ伊達の賤の女いとまなみけつらぬ髪のさみだれの頃
ひきひきにまかする水もたりぬらぬら高田窪田も早苗ううなり

菊田芳胤

天雲の高き御稜威を外国の庇ひの極み輝し座せ
例しなき君が行幸と人毎に待得てけふやあふき奉らん

菊田關雄　八十四年

埋木のうき瀬しらなみ立かへり花咲みよに安福麻の川

奥羽巡幸歌

中川英右　置賜県士族　福島県寄留

車轔々兮馬驕々、欃槍輝兮菊旗喬、風伯掃塵両師清道、桓々護衛士、其面如重棗、孝子義僕浴鴻恩、遍問疾苦言亦温、嗚呼汝兮億兆朕赤朕欲一人無訴冤、蠶桑之力汝勿怠、朕欲田野日闢四薄海、然後國富兵亦強、長與黎庶樂萬載、聞説奥羽往昔稱多虞、順化肅々今古殊、由来明主惜民力、深却進獻盛都兪、君不見子来迎駕人塡咽、如斯盛事終古無、

乙亥晩秋登靈山吊北畠氏故趾慨然有作

維石巖々聳雲間、千里遥對金剛、彈丸之地護龍種、想君隻手麾虞淵、時有新田與楠氏、聲勢東西爲角掎、一掃鎌府遂長躯、白旗所向盡被靡、嗚呼昊天亦何心、国賊還免一戦擒、大星忽落阿倍野、々色慘澹陰雲深、堂々忠節秋霜凛、青史千歳照肝胆、十七方受柱石名、奥羽優優製美錦、国司館下松臥池、日枝社前苔触碑、牧豎芻童不敢犯、俾人祇敬何如斯、君不見丈夫一息在天下、一身固當繫安危、鞠躬盡力元臣分、是公心事天地知、回頭摂泉何處所、西風蔫地、吹暮雨、秋老荒茅白満山、数行凄涙落断礎、

蠶卵に添て奉りける

照季

梓弓伊達の岡の蠶種とつ国人のこころにぞいる

此うたはいかにぞやおもはるれど、みちのくの蠶卵をば外国人もことにめでてよろこびはたこのたびささげつる蠶卵のいと勝れたるをここでも此人常にこのわざいとなむ心用ゐのなみなみならぬことのしるければ、大方の世人のよろづのわざつとめ物するはきみともなるべき為にいささか其よしを記してここにあげおくになむ。

陸奥御巡幸ををろがみ奉りて

作者未詳

えてしらぬふみもならはぬみちのくの民にをしやのみゆき成らん

鈴木温克　福島県士族

いつしかとみゆきをまつの下草もけふ奉る千代の言の葉

御巡幸をことほき奉りて

須田秀臣　諏訪神社祠官

木綿かけてさかきとるみもけふはまたみゆきの道のみさきはらはむ

久子　同人妻

いはしろのおどろが下も開けきて明らけき世のみゆきをぞ待

をさまれる御世のみゆきをあふぎつつ煙にぎはふ須賀川の里

関根義富　士族

思ひきやいまだ開けぬ玉鉾のみちのおくまでみゆきせむとは

竹下蓮明

けふまではみずきく桐のおほ君ををがみつるこそ惶れおほけれ
安子島三四郎　平民

天地に関きてけふを薫る風
竹下日聴　伊達郡泉原村 蓮昌寺前住

君にあひわがみもけふは冥加かな

祝詩一関

朱明天霽日升東、錦旗揺々翻暁風、遐壤小民何幸福、居然沐浴聖恩中、
箭内養浩　平民

無前聲績仰英隆、鳳輦巡行奥羽東、望拝不任欣抃至、蕪詩一関表葵衷、
渡邉嘉助　平民

風動旌旗錦影颺、鑾輿夙發彩霞傍、群生欣抃恩波遍、東奥仰瞻日月光、
劉　一　同上

短堠長亭迎御鑾、々聲隨處萬人歓、雖然僻遠皆王土、拝跪路傍得仰観、
古関唯助　福島駅市井 十三年

鳳輦東巡及海暾、薫風到處日旗翻、人呼萬歳歓喜、億兆蒼黙浴聖恩、
菊池周吉　同上小民

維夏清和節、鑾輿巡遠陲、恩波覃地角、教化遍天涯、戸々開歓宴、門々祝慶期、小民又何幸、坐仰鳳凰旗、
古関直紹　福島県

謹賦華祝六韵敢上

天地正清静、維月属蕤賓、鳳輦辞金闕、龍旗自柴宸、八州迎御帳、三陸仰洪鈞、霜露之攸墜、化工莫不新、謳歌称萬歳、沐浴被深仁、
大槻友仙　郡山村

御巡幸を拝み奉りて

陸奥の民やすかれとめぐります君のみゆきをあふぐ嬉しさ

夏祝

ゆたかなるとしのしるしも小山田の早苗にみえて御世栄ゆらし

鳳輦を祝ひ奉る歌

外つ国の果まで今やとどろかむ君がみゆきの御車のおと
阿部定助　福島町 平民

石の上ふるき昔もためしなきかかるみゆきをみちのくの里
学校取締　大森　至　福島県

仁徳治邦内、威風圧外洋、臣今迎玉輦、咫尺拝恩光、
矢吹小学教員　和知重雄

むら雲のさはらぬ空のあまつひのめぐる光りをうくる民草

奉拝御巡幸恭賦一首以呈徳大寺宮内卿閣下

同上　石井有信

暁天雲散清如水、旭日光威暉五洲、動植悠然楽生育、殊恩海岳以何酬、

四海一天暉徳華、東州行幸亦何加、飛禽走獣途傍拝、億兆生民慕鳳車、

なびかざる草木もあらじ古しへに例しもあらぬ此いでましに

御くるまに啼したひけり郭公

開成山に臨幸ましましけるを拝み奉りて

栗山啓翁　平民

君が代に安積の山を開きそめおくのかぎりは開き成す山

行幸ををがみ奉りて

立岩千秋　福島県 七十三年

陸奥も天の岩戸の開けつつ光りかがやく心ちこそすれ

夏祝

みづえさすは山しげ山しげけれどしげきはみなの恵なりけり

題しらず

雨そそぐ雫の田井に袖ぬれて秋をたのみの早苗とるなり

門間豊春　信夫郡瀬上村

天つ日のみかげをろがむかしこさよくもらぬみよにすむみなるとて

行幸を拝み奉りて

大竹儀兵衛　白川桜町七十年

花も葉も尊き桐の一葉かな

御代のありがたきをよろこび侍りて

みにあまる月をいただくすずみかな

かけまくもおそれみつつしみ大君のみゆきをいはひ奉りて

よみ人しらず

大君の深き恵みは万代をへて長かれといのる民くさ

門ごとにたつるいはひのみはたこそわが日の本のしるし成らめ

わか様の名だたる蛍いやしきも君にささげて光りまさなむ

これは二本松駅にやどらせ玉ひける時行宮の御いぶせさをなぐさめ奉らむと、此ところのものどもいと大きなる籠に数万の蛍を入て献りけり。其籠の四すみに此詞かきと歌ども四ひらにかきわけてぞゆひつけける。わか様の云々はいささかいぶかしけれどもこはこのわたりの名所にてもあらむかし。

呈侍従番長高崎君閣下

福島県第八学区取締　井深常七郎

常謹テ書ヲ閣下ニ呈ス、閣下鳳輦ニ従ヒ此地ニ至ルノ日、行旅ノ労ヲ厭ハズ、直ニ区務所ニ来リ、学事及ビ茲ノ土ノ景況ヲ問フ、尊意ノ辱キ、僕等実ニ感喜踏舞屣歯ノ折ルルヲ不知、次日亦駕ヲ枉テ学校ニ臨ミ、生徒ノ業ニ就クヲ親覧セラレ、且ツ児輩ノ作文ヲ出ス可キヲ命ズ、常等閣下ノ深意ヲ不知ト雖モ、密ニ聞ク聖意ノ注ク所常ニ学校ニアリト、閣下亦常ニ君側ニ侍スルヲ以テ、或ハ乙夜ノ覧ニ供スルモ知ルベカラズ、唯恐ル生徒ノ学術未ダ進歩セズ、ソノ文拙劣汗顔ニ堪ヘズ、然リト雖モ之ヲ出サザレバ反テ閣下至大隆渥ノ意ニ背ク、故ニ敢テ辞譲セズ、閣下幸ニ採納セバ、光栄何ソ之ニ如ン、僕疎愚ノ罪ヲ顧ミズ書ヲ呈ス、閣下ソノ愚ヲ矜ミ、其罪ヲ録スル事ナケレバ幸甚ナラン、常恐懼再拝

聖上御巡幸ヲ奉祝ノ文

小学生徒　齋田信古　十二年一月

小学生徒信古、謹テ奉祝ス、我等小童輩、文運隆盛ノ世ニ生レ、開闢以来未曾有ノ御巡幸ニ遭逢シ、辱クモ天顔ヲ拝スル事ヲ得タリ、欣喜ニ禁ヘズ、我輩小童等、其レ之ヲ心ニ銘ジテ、勉学勧業シテ、皇恩ノ萬一ニ欲報、依テ謹テ祝辞ヲ上ル、

天皇陛下御巡幸に付奉拝の為友人を招く文

小学校五級生　渡邉家那　十一年四月

本月十四日今上天皇様此地へ御巡幸は吾国開闢已来始ての御事に候へば御同前に誠に有難き仕合のことと存じ奉り候依て皆々様方御拝賀として御出被渡候やう一筆しめし奉り候めで度かしく

これは此たびの行幸の聖慮の注がせ給ふところくさぐさあるが中にもはら民間の疾苦をとひ、孝子節婦をめで、産業の盛衰、学校の進否をみそなはし玉はむとの、いともかしこくいとともありがたき御事にしあれば、御供つかへまつる人々は更なり、いづくの誰かは此大御心をかしこみあふぎ奉らざらん、されば常に御かたはらにさぶらふともがらは、供奉宿直（ミトモトノイ）のいとまあるをりをりは、そこはかとなく出ある

きて、おほん耳目のおよばせ給はぬくまぐまを尋ね求めて、みもしききもしつる事どもをうちうち聞えあげつつ、千万のひとつをも補ひ助け奉らばやと、おのおの思ひあへるなるべし。ことに学校は人材を養ふところにしあれば、いづこにてもむねとまかりて、其ありさまをみきき物しけり。正風たまたま侍従山口正定とともに、この須賀川なる学校にいたりてみれば、教官の心用ゐ生涯の勉学、こと処よりは勝れたりければ試みに優等の生徒らに題をあたへてふみを作らしめけるに、たちどころに石板にしるして出せり。いづれもとしのほどよりはをとなびて物しければ、後に浄書して出すべきよしを学区取締井深学士頭にしめしおきけるに、又の日この一篇の文章をそへておこせたるを、やがて其事を具して御覧ぜさせ奉りぬ。此文つくりし生徒遠藤作太郎七月十二年、遠藤勝吉一月十三年、齋田信吉一月十二年、山田飛己一月十二年、渡辺家那四月十一年、此内登茂五月十二年、原たい五月十二年の七名にていづれもおとりまさりなくかきなせる中に、もともいとけなきものつづれる二章と、井深のそへ文とをあはせあげて、この学校のありさまをしめすになむ。

志方亀喜　熊本県士族　福島県寄留

節正和雨正晴、鑾輿東幸萬民迎、恩波所被無遐邇、鼓舞讙呼祝太平、

内藤静山　磐瀬郡須賀川平民

いはまくも、あやにかしこき、遠神、吾大君は、九重に、おほましまして、嵐山、花さく春も、紅葉する、さがのの秋も、行幸の、ことだになきを、春花の、開るごとく、成らなる、大御代なれば、鳥が啼、東の国の、みちのくの、くにのはてまで、しつて巻、いやしき民の、なすわざを、みし給はむと、下情、きこしめさむと、神ながら、おもほすなべに、天地も、よりて仕へん、かしこきや、なには高津の、高宮に、国見をせすと、のぼりたち、民のかまどに、立けぶり、細きけぶりも、たちまちに、賑ふ御世と、たたへにし、昔かたりを、今ここに、おもひあはせて、まそかがみ、明らけき世を、天水、あふぎみ奉る、ことのたふとき、

短歌

思ひきや吾大君のいでましを鄙のあら野にあふぎみむとは

宮城県

織物にそへて奉る歌

奥山照子　宮城県平民　梅津知教妻

安みしし、吾おほきみは、久方の、あまつ御神の、みこころを、受つぎまして、天下の、あを人くさを、いつくしみ、めぐみ給ひて、あし原の、国やすかれと、天離る、ひなのさかひに、はろはろと、やそとものをの、おみたちを、比きゐましつつ、古しへに、ためしもあらぬ、行幸を、をろがみまつる、かしこさは、なにとあふがむ、尊ときは、なにとたたへむ、あめつちの、神の恵みと、大君の、みたまのふゆは、うつそみの、世にあるきはみ、きもむかふ、こころのかぎり、つくしても、千重のひとへも、いかにして、むくいまつらむ、天地と、いやとほ長く、とことはに、みさかえまさむ、ことをしも、ことほがひつつ、玉だすき、心にかけて、おる機の、いとひとすぢも、みめぐみに、もれぬみいつの、み光りと、あふぎたふとび、しづの女の、しづはたぬのに、まきそへて、たたへぞまつる、かしこかれども、

此はしがき、織ものにそへて奉るうたとあれば、織物を奉りしやうにきこれど然らず。これは県々にて、其処より出る何くれの物どもを、県令に仰せて御覧ぜさせ給ひけるに、この宮城県にても、さるたぐひのものここらとりあつ

めて物しけるを、おもと人らとり出でて御覧ぜさせ奉りける中に、あらたへの布一巻ありて、そが中にこの長うたをなん巻こめたりける。やがて正風におほせてよみあげしめ玉ひけるに、こころも詞もいとめでたかりければ、をかしとやきこしめしけむ、みけしきうるはしくぞみえさせ給ひける。

宮城県参事　渡邉　習

大君の行幸待えて宮城野の草木もけふや色増るらん

ちとせへて君がみゆきを松島のまつもかひあるけふとやはあらぬ

をしへの道に心くだきけるを、奥羽にみゆきありてそこらみそなはししに、教院にはさることもなかりしかば悲しみのあまるによめる、

志波彦神社鹽竈神社権宮司　遠藤信道

高光る、吾大君の、知食、国とはいへど、きこしめす、国とはいへど、陸奥の、みちのくちなる、宮城のの大野の原に、いなしこめ、耶蘇のしこ草、生ひそめて、月にひにけふ、その草の、しげりにしげり、その種(クサ)の、もゆるまにまに、名にたかき、をはぎが花も、やゝややに、かれこそまされ、やゝややに、たえこそゆかめ、此はぎの、もとしたえなば、このはぎの、花しさかずは、月みにも、人はとひこず、花みにも、人はたづねず、ゆく月の、ここだもすぎず、立としの、いくらもあらぬに、野らはみな、耶蘇のしこ草、おのかじし、しげりかゆかむ、そこ思へば、いともうれたく、ここ思へば、あやにゆゆしく、むら肝の、心ふりおこし、たまあへる、友らさそひて、焼鎌の敏鎌とぎつつ、ますらをの、いつの雄たけむ、ふみたけび、すすしきそひて、かたへより、右に左に、かりはらひ、うちなびけり、今よりは月もみるべく、いまよりは、花もみるべく、百八十の、しこの草葉は、大かたに、かり拂ひたる、そのはしに、天皇の、いでますと、きくにつけつつ、ここにしも、みゆきあれかし、ここにしも、臨みたまはね、萩はしも、いまださかねど、秋はしも、いまだたたねど、いそしみし、心の花に、みがきてし、こころの月を、かにかくに、みせまつらんと、いのりつつ、待にし物を、白川の、しらでや君は、松島ゆ、塩がまかけて、行幸は、ありときけども、宮城野は、玉田横のの、よこにのみ、とほく見さげて、とほらずと、きけば悲しく、いでますと、もへばかなしく、尽せりし、力もたわみ、おもへりし、こころもくだけ、白露の、おきそふままに、萩の葉の、おもひしなべて、音のみしなかゆ、

此長歌はしも歌ひ掲るすなはち人をして感慨の心をきざしむ、さるはさばかりをしへの道に心を尽しけむことの深かりければ、さる時にあたりて悲しみのあまり心におもふことをつつみあへず、うたひ出たる故にやあらむ。

松島塩竈に行幸ありける時よめる

浦はしも、さはにあれども、島はしも、ここだあれども、大君の、御船はてたる、松島や、まがきかしまの、へだてても、ちがのうらわに、藻しほやく、けぶりたえせぬ、しほがまの、うら海つづく、松島は、ちしま五百島、ももやその、島々そならへ、とことはに、松こそたてれ、しかれこそ、名にもおひぬれ、松島は、しまのまほしま、うらのまほ浦、

いざしらぬみるめ成けり大君のみふねはてたる塩がまの浦

武隈松

としへずばいかであふがむたけくまの松にかひあるけふのいでまし

鹽竈浦

人ならば都にいざとおぼすらんみるめもあかぬ塩がまの浦

浮島　　同上禰宜　大崎寛繁

わだつみのなみにうかびて幾千世も契りかはらぬ浮島の松

宮城野　　同上　橋本　貞

たびねしてこ萩の花を露ながらこよひかたしく宮城のの原

袖渡　　同上　佐藤伊箇志

立よらぬ人こそなけれ宮城ののこのした露は雨にまされど

小黒崎　　同上権禰宜　木村一知

さみだれにかわかぬ袖のわたし守水かさ増りてこきぞわづらふ

松島　　同上　鈴木蕃親

小くろさきむらむらたてる山松の木末をわたる風の涼しさ

名取川　　同上主典　落合時直

松島や松のときはにいでましを待しかひあるけふにもあるかな

逢隈川　　同上　鈴木蕃親

名取川そこにしづめるうもれ木もよにのこりなく歌はれにけり

奥海　　同上　鈴木蕃親

くみぞしるにごらぬ君の大御世にあぶくま川のたえぬながれを

野田玉川　　同上主典　落合時直

かしこしなみをばいづこにおくのうみの深き恵みのみよに仕えて

籬嶋　　同上主典　落合時直

夕されば野田の玉川みなそこに影をやどして蛍とぶなり

白髯山　　同上主典　落合時直

みわたせばちがの浦わのまがき島岩うつなみに夕日かがやく

緒絶橋　　同上　鎌田足穂

あやふしとかけて思はずたび人はをだえの橋ときわたれども

玉造江　　同上　橋本　貞

水の面にうつる蛍は名におへる玉造江に光りそふらむ

青葉山　　同上　橋本　貞

山の名はいかにととはばわが緑木々のこずえをさしてこたへむ

陸奥山　　権少講義　古山厳石

とこしへにみなさかえむと常しへにこがね花さくみちのくの山

松賀浦島　　権少講義　古山厳石

そこ清き海のこころも静かにて君がみゆきをまつの浦島

末の松山　　教導職試補　佐藤国穂

かにかくに君にたがはじあなかしこ末の松山なみはこゆとも

沖の井　　教導職試補　佐藤国穂

かくばかり君が恵みの深き世にややおきのゐはあせにけるかな

玉田の里　　志波彦神社塩釜神社主典兼訓導　赤岡矩雄

おく露の玉田のさとも大君のみゆきにけふは光りそふなり

壺碑　　志波彦神社塩釜神社主典兼訓導　赤岡矩雄

大君のひろき恵みの嬉しさはかきつくされし壷のいしぶみ

白髯山　　志波彦神社塩釜神社主典兼訓導　赤岡矩雄

おほきみのそのいでましに花むけの山もみどりにわかがへりけり

奉拝行幸詠歌　　志波彦神社塩釜神社主典兼訓導　赤岡矩雄

いはましは、かしこかれども、遠つ神、わが大君は、かけまくも、

あやにかきこき、神ろぎの、天つ御神の、みよさしの、まけのまにまに、こも枕、高天の原の、いはくらを、はなれ給ひて、八重雲を、おしわきまして、日向なる、高ちほたけに、天降、くだらせまして、あし原の、国ひらかしし、すめみまの、神の命の、あめつちと、共にかはらぬ、久方の、あまつ日嗣を、つがの木の、いやつぎつぎに、つがせこし、君にこそませ、かくてしも、いまのをつつに、天の下、しろしめしける、さにつらふ、吾大君は、かし原に、御世しらしにし、すめろぎの、君の命の、いやたけき、み跡残して、此河の、降ちゆく世を、古しへに、うちかへしまし、鳥か啼、吾妻の江戸を、うちひさす、都となして、大御世を、とのへたまひ、民草を、めぐまひたまひ、国といふ、くにの八十国、島といふ、しまの八十しま、くまもおちず、みそなはさむと、玉ぼこの、みちのおくまで、いでましの、大御車を、かしこくも、めぐらしませり、かくばかり、たふときみよに、生れあひし、幸をし思へば、野べ草の、葉末にむすぶ、露のみの、おきどころさへ、あらぬまで、嬉しくしあれば、おのづから、泪しながる、袖ひつまでに、

明治九年六月十四日陸前国にありて御巡幸を拝み奉りてよめる

同上宮司兼少教正　落合直亮

海山にさらさむ屍ながらへてけふのみゆきにあひにけるかな

そのつぎの日みけしきたまはりてよめる

たのみなくおもひし身さへあまつ日の光りにあたるけふにもあるかな

塩釜松島をめぐりみそなはし給へるをほぎ奉りてよめる歌

八隅しし、吾大君の、神ながら、きこしめしける、天下の、くにてふ国に、浦はしも、さはにあれども、島はしも、ここらあれども、陸奥の、みちのくちなる、塩がまや、ちかの浦わゆ、松島の、八十島かけて、うらつづき、うな原つづき、舟うけて、なみのよるよる、ここのさき、かしこの岸に、さをさして、みめぐるばかり、なぐはしき、ながめはあらじを、いにしへに、あとしもまさぬ、たふときや、けふのみゆきに、ちかの浦の、ちかひ久しく、松島の、まつにかひある、時しえて、うへも嬉しと、ちかの浦の、いやちかちかと、松島の、まつろひなびき、うつそみの、世のたみ草と、もろともに、いやともどもに、君が世の、御いつかしこみ、ちかのうら、まつが浦島、うら安く、よりて仕へん、よろづよまでに、

反歌

西のうみのいでましきとしそのひよりけふのみゆきを松が浦島

おほみゆきををろがみまつりてよみ侍りける歌并にいはひうた

落合直亮妻石原氏女　鶴子

やすみしし、わが大君は、うちひさす、都大路を、すがすがと、いでましししより、春葉ふく、風のあしたも、さみだれの、雨のゆふべも、いとはさず、いそしみまして、かしこきや、おほ御車を、みちのくの、これのはてまで、はろはろと、めぐらしまして、あめの下、あを人くさを、おしなべて、めぐまひたまふ、あさからぬ、みたまのふゆの、かけ高き、おほみ光りに、しづたまき、賤か垣根の、草葉さへ、色やますらん、かれ木さへ、花や咲らむ、そこ思へば、あやにたふとく、そこ思へば、いともかしこく、数ならぬ、塵のこのみは、朝露の、おきどころさへ、おもほえず、心も空に、いはむすべ、せむすべしらに、衣手は、とほりてぬれぬ、其嬉しさに、天地とともにかはらぬ君が代はよむとも尽し濱の真砂のきみがよはとはにかはらぬ千引石の曳ともいかで動くべしやは

祝世

鮎貝盛光

くもりなきみよの光りに影そえて月日もいまやてり増るらん
へだてなくあつき恵みの風にいまなびかぬ草はあらじとぞ思ふ

奉賀聖駕幸陸前

大島丈輔　士族

於戲我皇帝、柔恵撫四彊、又欲問民苦、鳳輦發東京、維年之夏某月日、巡狩先達我東方、鑾路坦々無纎塵、祝幟翻風影央々、伏衢億兆祈聖壽、中有秀士獻頌章、南巷北街人如織、讙舞誰不唱太平、草木露霑被膏澤、山河雲霽帯恩光、人心熙々風日和、邉境髣髴帝王郷、願我皇帝愛多福、以此盛擧為典常、徳輝所及無窮極、宛似太陽照八荒、

野詩一章并引

壬石小学校助教　斎藤恭平

抑我日域、天祖統ヲ垂レ、一姓連綿、天壤ト與ニ彊リ無キハ、宇内万国比倫アルナシ、然リト雖モ世久ジウシテ盛衰ナキ能ハズ、伏シテ惟ミルニ古ヘ天皇ノ其統ヲ大イニスルヤ、学ヲ建テ師ヲ置キ、以テ教ヲ明ラカニス、爾来列聖相承ケ、延天ノ際ニ至リテ、文物ノ盛ナル煥然トシテ極マリ、保元以来帝紘紐ヲ解キ、邦国離折四百有余歳、国勢漸ク変シテ封建ニ帰シ、徳川氏司牧タル、府ヲ江戸ニ開キ、武ヲ偃セ文ヲ修メ、治具復タ大イニ張ル、殆ント三百年、然リ而シテ今代ニ至リ封建ノ制亦タ弊ヲ生ジ、天下ノ諸侯盡ク封土ヲ奉還ス、於是主上叡明卓絶ノ見ヲ以テ時ト勢トヲ洞察シ、断然英決乃ハチ藩ヲ廃シテ郡県ノ治ニ復シ、政治ノ良法ヲ旁ク海外ニ求メ、各国並立ノ洪基ヲ建ツ、爾来日浅シト雖モ制度文物煥然一新、天開ケ夜明クル如ク、頓ニ旧観ヲ異ニス、然ルニ恭シク惟ミルニ主上猶自ラ安ンゼズ、遠境地邉地未タ風化ヲ被ラザル民アランカト、於是曩ニ鳳輦ヲ発シ鎮西地方ノ事情ヲ見聞シ今復タ奥羽二州ニ巡幸、躬自ラ民ノ疾苦ヲ問ヒ、忠臣孝子ヲ旌賞シ、大イニ聲教ヲ敷ク、嗚呼盛ンナル哉、實ニ振古未曾有ノ盛時ニシテ国安ヲ無窮ニ保持スルハ及ハチ教ヲ明ラカニシ人材ヲ養フニ非ラザレハ能ハズ、故ニ五萬三千有余ノ学校ヲ天下ニ設立シ、教導ノ方法亦タ大イニ具ハル、嗚呼皇国ノ民タル者、踴躍喜幸ノ至リニ勝フ可ケンヤ、況ンヤ愚苟モ教員ノ末ニ列ナリ、此盛事ニ遭遇シ、感激奮発一層勉励、生徒ヲシテ駸々トシテ進歩セシメ、更ニ涓滴ノ聖世ニ答フルナカル可ンヤ、及ハチ敢エテ鄙誠ヲ竭シテ聊カ二十八言ヲ賦シ、謹テ尊厳ヲ冒涜シ奉ル、

率土何人不戴仁、六龍過處幸殊新、感恩億兆皆精励、肯比堯天鼓腹民、

小学校生徒、聚蛍奉供天覧、因謹題小詩於其嚢、敢冒涜尊厳、無月無風野水傍、飛蛍千點乱煌々、兒曹太好聚他得、早獻君主増国光、

奉祝巡幸作并短歌

中講義　奥山正胤　福島県平民　宮城県寄留

いはまくは、あやにかしこき、やすみしし、わがおほきみは、天の下の、公民を、なでたまひ、恵みたまひて、わだつみの、そこより深く、神ながら、おもほしめして、神世より、あとしもまさぬ、玉鉾の、みちのおくまで、たふときや、おほみくるまを、はろはろと、めぐらせるこそ、いひしらず、かしこかりけれ、かかる世に、生れあひぬる、しづのをの、数ならぬみも、嬉しきに、けふのみゆきを、鶉なす、いはひもとほり、荒しもの、いはひけしつつ、ふしをがみ、あふぎまつれば、物部の、八十伴のをの、おみたちは、御さきみあとを、うちかくみ、したがひまつり、すがすがと、いでたたせける、みいつはも、いともたふとく、みよそひ

はも、いともうるはし、これをしも、いかにあふがむ、これをしも、なにとたたへむ、然れこそ、百八十国の、貢国ゆ、黒船なべて、つどひきて、つかへまつりぬ、こをもへば、神ながらなる、ひのみこの、天津日嗣を樛の木の、いやつぎつぎに、高御くら、太高志らし、天地と、いやとほながに、常盤に、うらやす国の、うらやすく、ひじりの御世と、しろしめす、みよは動かじ、現神、吾大君は、石がねに、おひたる松の、神世より、かはらぬ色を、松島や、まつがうら島、うらわかく、わかえましつつ、かぎりなく、ときはにまさん、いくよろづよも、

短歌

陸奥のおくのおくなるえぞかすむ千島のはてもみそなはすらん

奉祝行幸歌并短歌　八阪神社祠官　田中眞功

遠つ神、吾天皇、八島国、まねきが中に、ひむがしの、道のおくまで、くまもおちず、国見をせすと、神ながら、おもほすなへに、あめつちも、よりてあれこそ、大御門、いでましたまひ、御ともには、おほまへつぎみ、ことはかる、つかさつかさに、物部の、八十氏人を、むら鳥の、うち群たちて、臣の子は、御前を拂ひ、天離、鄙のなかじを、はろはろと、わたらせたまへば、彼地此地の、おほみたからは、ともどもに、あともひつどひ、天つひの、旗手なひかし、玉鉾の、みちのべにいでて、鶉なす、いはひもとほり、をろがみつ、かかるためしは、ちはやふる、神つみよより、またさらに、伝へきかぬを、しらまゆみ、いまの現に、あふぐこそ、かしこかりけれ、たふとかりけれ、

たまきはる命あらずばあまざかるひなのみゆきをいかであふがむ

弥阪の宮の前にてみゆきを拝み奉りて

天皇のみゆきにあひてけふよりはいやさかはえむ吾神の宮

螢を奉ること葉

掛まくもあやにかしこきかも、あまつひの御子の、ことし六月の初、東の都をいでましたまひ、国々の村里をみしたまひたるに、道のざささきより、なにくれとなくめづらかなるを備へまつりたりとなん、かくてみちの国のなからなる此ふるかはのさとを仮宮としたまひたるに、つかさどころ、村のをさはさらなり、大御たからあまたつどひて、おほみこころをなぐさめ奉らんとおもふ物から、ささげものの御ゆるしあらねば、とやせましかくやせましと思ひわづらひたり、然ありしに学びところにつどひたる男女の和らはらかおもひけらく、かくわがともの人の人たるみちのをしへをうけ人といはれむも、ひとへに大君の御めぐみをかがふりてなれば、このよろこびには、あまたのほたるをかりとりて、大御前にはなちたてまつり、大御心をなぐさめたてまつらば、なにばかりかおもしろしとみそなはせたまはむといへば、いづれもしかよけむとてかうものすることとはなりにたり、いささかながら此まごころをあはれみ給ひてみしたまいらば、うなゐらはさらなり、おもちちも、かしこしとも嬉しともおもはざらめや、この一ことをおなじさとなる田中真助、ゐやまひつつしみてまをす、

草枕旅宮にしもうちむれて玉しくばかり光る夏むし

窓にしもあつむる蛍ものまなぶうなゐらにこそかりとられけれ

竹中玄修

やすみしし、吾大君は、千早振神にしませば、天てらす、日月のごとく、たにぐくの、さわたるきはみ、やそくまの、隈なすくまの、くまもおちず、みいつかがやき、てらします、おほみひかりを、しき島の、やまとの国の、くに人の、誰のあふがぬ、かしこきや、神のひじりの、すべらきの、君は此たび、あまざかる、ひなのたびぢの、いでましに、えぞがすむらん、あたりさへ、みそなはさ

んと、この月の、ふつかといふひ、うちひさす、都の空を、朝鳥の、あさたちまして、すみぞめの、ゆふべゆふべに、やどりまし、日数重ねて、二十日あまり、四日といふ日、みちのくの、みやぎの里を、かりそめの、みやゐとなして、此さとに、しばし御車、とどめまし、とどめましては、その里の、をとこをみなの、人さはに、野にも山にも、いでましを、をがみまつると、ししじもの、膝をりふせ、うしもの、うなねつきぬき、ぬかつきて、たふとかりける、み光りに、あへるを誰も、村ぎもの、心にしみて、かしこしと、あふぎまつりぬ、このたびの、みゆきにあへる、さとといふ、里のかぎりの、人はしも、誰もしかこそ、あるべかるらし、

短歌

かかる世に生れえしみの嬉しさはおなじ心に誰もいふらむ

行幸をほぎ奉る歌并短歌

照井学校教員　田村平九郎

掛巻も、あやにかしこし、いはまくは、あやにたふとし、天皇の御言のまにま、天の下、百八十国を、鎮めまし、とほきあづまに、みゆきすと、こときくからに、里人も、こと里人も、をちこちゆ、袖ひきつらね、玉鉾の、道のちまたに、左右、つどひあまりて、野に山に、蹲くまりをり、安御世の、奉なきみよと、おいたるも、わかきもむたに、おしなべて、神の御世より、ためしなき、吾嬬つか原、はてまでも、けふのいでまし、かしこみて、ことほぐ声を、きかくしよしも、

短歌

すめろぎのけふのいでましまつ島やをじまの苫屋ちりをはらひて

馬の叡覧ありけるを遙に拝み奉りて

すめろぎの、しきます国の、やす国を、いよよますます、安国と、ことあげしつつ、里人が、多につどひて、栗駒の、山の麓の、栗原の広き大野に、引出る、駒をしみれば、あざやかに、連銭あし毛、鹿毛糟毛、柑子栗毛に、栃栗毛、踏雪としも、まばゆけく、月毛もさやに、雲雀毛も、雲井に翔る、ここちして、嘶きわたり、冀北てふ、里にもおちず、伯楽も、御前さらずて、品さだめ、さぶらふみれば、真鷹よし、君の恵も、食国に、みちたらはして、穏ひくて、御稜威かしこみ、たつ民の、竈の煙り、賑はひて、あなおもしろし、これの御牧場、

短歌

雲ゐにもかけらむばかり声高くいななく駒はなにと名づけむ

時のまに千里ゆくべき駒のをにつきてみまほし蠅のこのみも

恭賦野調二首

輦輿千里映河山、俊傑如雲供奉班、開闢以還新行幸、幾般駐蹕問民艱、

維新大政自無邊、泰運豊亨萬物宣、爲是聖君垂徳澤、兆民永載太平天、

御巡幸を拝み奉りて

齋藤梅翁　士族

あめの下あまねくうるふ御世なれや恵の露のなべてかかれば

ながらへて八十餘りのとしへずばけふのみゆきにわれあはめやは

菊田源兵衛　仙台通町商

あまつひのかかるめぐみは五月雨のふりにし世にもきかぬ成けり

荒井　悟　増田駅

大君のみゆきを待て松島のまつの風こそ千代ははひけれ

恭拝観巡幸賦其盛事

茂貫橘洲　坊主町

馴々鳳輦駕花聡、萬戸千門日色紅、只道通街人若織、旌旗委靡太平風、

動ぎなきわが日の本の大君のけふのみゆきに逢ぞ嬉しき
茂子　茂貫橘洲妻

世にあればかかるかしこき御世にあひて君がみゆきををろがみまつる
天皇の東国までみゆきし給ふことのありがたさを恐れみ畏みて
教導職試補　丹野秀精　本壽院住職

大みゆきいははぬ民やなかるらん楽しき御世にあふぞたのしき
八阪神社祠掌及学区取締補　手代木誠一郎

殿ふしわかであづまのおくのわらやをも隈なくてらす天つひの影
大政一新歳月豊、蒼生如草偃仁風、天皇盛徳比紅旭、先照扶桑陸奥東、

陸奥行幸を祝ひて
小笠原好文　大柿村医

みゆきます此君が代は八百日ゆく濱の真砂の巌となるまで
ためしなきけふのみゆきは君が世のいや開けゆくはじめ成らむ
田中八重子　平民

おほ君の御いつかがやく御代なればみかげあまねしみちのおくまで
紺戸徳得　平民

おしなべて民の烟りの深かれとふかき恵みのみゆきなるらん
おだやかにめぐるみくるまひく駒の足もなづまぬ奥の細道
遠藤清良　敷玉早御王神社兼多稼津神社祠掌

大君のみゆきかしこみ天長く地久しきをあふぐけふかな
出ましの奥の細道ほそからぬみなとこそなき大み光りに
大久保右仲　諏訪神社祠掌

明らけき君のみゆきのみ光りにこさふくえぞもくもりなきかな
吾妻路のみちのくの人は神代にもきかぬみゆきにあふにかしこき
戸長　鈴木嘯月

あふぐなりあやに開けて陸奥もめぐみにもれぬけふのみゆきを
家毎の日のみはたにも民草のなびきしたがふ色ぞみえけえる
紺戸半十郎　千石小学校生徒掛

大君のみゆきにあひて陸奥の山も黄金の色やそふらん
ちはやぶる神の御末を受ましてしろしめすなりおほやしま国
おくの海の波も静けし大君の恵みも深きけふのみゆきに
栄子　高橋左角女

あふくにも餘りあるかなくもりなき神代ながらの天つひづきは
あまつひのてらすかぎりはそのみちの光りかはらじいく万代も
小泉長善　北二番町

此たびのひなのみゆきはためしなき君がめぐみと誰かあふがぬ
陸奥のはてのはてまでもよほしの君かみゆきぞ尊とかりける
田中大次郎　師範学校生徒

ちよやちよ色もかはらで松島のまちしかひあるけふのいでまし
都より雲井はるかにへだたれどいまみくるまをみやぎのの原
山口真臣　士族

大きみのみゆきをここに松島の松の千よへしかひは有けり
大道は髪のことことに青柳のけづり立たる御世の風かな
君か代にあぶくま川のほととぎすぽつと鮭でも登りこよ河岸
宮城野はこはさもちひの御馳走に藤袴きてならふ垣下の宿
十府の菅薦

みふ十府よみふるしたるこもなれど一夜はむすべ草の枕に
哥丸

やはらかにうへしたねれば大御世は鶴と亀との餅あそびなり
こたびみちのくに行幸し玉ふは古しへより例しなき事にて、

民の世にふるさまをみそなはさん御いつくしみよりおこれば、いともたふとくいともかしこくなん、陸奥はいそのかみふるき昔よりえみしの国といひ伝へて、九重の雲のうへはさらなり、都の空をもわけみぬ人のみおほくて、海あらく山険しく鬼もこもれるなどあだちが原の古しへをさへひきいでておそろしきことにのみいひ伝へたれどその国その人もみな大君のおほみたからと御いつくしみ深ければ、かく遠きさかひにさへ御輦をめぐらし給ひてその地をふみその民を撫玉はむとのいや高き御恵は富士の高松よりも高く松島のうみよりも深し、いやしきみにもかかるみよにあふをばいかなる幸とかいふべからん、されば昔にまさる世と成て、よろづの道も明らかにひろまり、おのがまにまに其道をだにわけいれば行へまどはぬみよとはなりにたり、こたび大きみの其大御影を拝み奉らんとて、このわたりにすむ諸人は男女のわかちなく、老を助けいはけなきをいだきてもゆかまほしと海をへだてし島人も塩やく蜑をとめらにいたるまで、からき思ひを忘れつつ待奉りし心ばへ、いはけなき子の父母を慕ふにことならず、あはれこのみちのくのえみしも、皇御国の国民と生かはりたる心地して、開くるみちにすすまむとするは、嬉しともうれしからずや、そのよしをいささか言の葉のみちしらぬながらに拙き筆にまかせつつ思ふかぎりかきつめしは、いといとはばかりおほかれど、忘れず山のわすれかたくて、浅香の沼のあさはかにも、ことのはによせてかくなむ、

区長　瀬上則明

みちのくをえみしの国と思ひしは君が代しらぬ昔なりけり
みゆき待けふを思へば君がよの恵みにもるる人なかりけり

いよ子　塩釜村寄留留守基沿祖母七十三年

大君のみゆきかしこみあふぎみてなびきにけりな四方の民くさながらへて君がみゆきの御車にめぐりあふこそうれしかりけれ
風松も千世をゆつるの声すなり君がみゆきのけふを待えて
みめぐみの露しかかれば色深くなどさかざらむなでしこの花

此みめぐみのとなふるは、この人よはひ古稀をこえて、学校の教師に挙られしよりこのかた三年のあひだ一日も怠らずつとめいそしむよしきこしめし給ひ、右のおとどの旅のやかたにめして、其いさをを誉させたまひ、羽二重きぬをさへ賜はりぬとききて、おのれ、咲出む色いかならんみめぐみの露さへかかる君がなづしこ、とよみてたよりにつけて遣しける返ごとにおこせたるを御覧ぜさせ奉りしなりけり。

行幸ををろがみ奉りて

紀子　同上留守邦命妻

松にふく風さへいまはこえこえに君をちとせとよばはぬぞなき

御いでましをほぎ奉る歌并短歌

後藤十右衛門　塩釜村

いそのかみ、ふりける世にも、ためしなき、御世の恵の、御車に、めぐりあひぬる、幸をこそ、なににたとへめ、掛巻も、かしこきかもよ、いはまくも、たふときかもよ、みちのくの、くにのはてなる、ひなにしも、けふを待えて、天つひの、御旗をかかげ、いでましを、をろがみ奉り、おのかじし、ほぎとよもして、君がせを、常磐かきはと、かしこくも、いはひまつりて、うたひこそすれ、

短歌

かかる世にあはずはいかで高しらすてるひのみかげあふぎみるべき

奉祝

六龍千里恭東巡、仰知邊陬王化新、輦道経営雖勿速、歎虞四集子来民、

磐井高徳　仙台隠士

大きみの行幸待えて宮城ののくさきもけふは色増りけり

八重子　金成駅阪本彦兵衛養母

老のみのかぎりしられぬ嬉しさはけふのみゆきにあふにぞありける

早阪甚左衛門　古川駅農

思ひきや世に例しなき大君のみゆきを鄙に拝むべしとは

謹奉賀巡輅

佐藤新一　士族

躑躅岡頭青葉東、何圖今日置行宮、一條輦道直如髪、草木靡然王化風、

肩摩轂擊萬家開、且喜且迎鸞輅来、王化従茲東極遍、只今誰説古仙臺、

親巡千古未曽聞、葵嚮衆心欽聖恩、拝観路傍人若織、鸞輿穆々帝王尊、

紺戸　毓　千石村平民

六龍巡北地、千古未曽聞、盛挙眞今日、山河帶五雲、

齋藤一守　寄留福島県農

瑞氣氤氳擁萬山、鑾輿出狩問民艱、皇恩如海深無限、億兆欣々仰聖顔、

恭奉喜拝龍顔

眞壁古陽　瑞岩寺住職

両晴輦路曜朝暾、臨覧江山佳色繁、正是荒堂移錦褥、簾前咫尺謝天恩、

謹奉祝行幸

東方傳蹕日旗翻、風揚塵街両洗邨、開闢以来偏所仰、民間喜氣満乾坤、古辟伽藍駐玉鑾、行宮一夜祝平安、道心無物供清覧、開谿門前松嶋觀、

奉迎鸞輿歌

眞山温治　士族

皇帝發京畿、明治九年夏、薫風吹茂樹、青々映鳳駕、鳳駕巡遊東北邊、到處無人不欣々、幾萬祝旗満街巷、央々翻風紅繽紛、無男無女無老幼、東西南北人輻湊、祥雲影裏迎鸞輿、齊祈太平天子壽、嗚呼東陬僻遠之地迎鸞輿、天開地闢以来所曽無、今年今日知何幸、仰觀歯簿是其初、前騎駸々躍駿馬、旭影煌々建干旗、肅雝賢相是後乗、知是日夜賛廟謨、喜此風雲際會日、大綱小目自秩々、美風嘉化無不及、善樹生花遂結實、徵草承露猶芊々、不知何以報此恩、唯机上帝佑我皇、永張綱紀黎元、

明治九年六月廿四日、鳳輦臨我宮城県庁下、徵臣篠川定吉、田手喜右衛門、等誠惶誠恐謹獻祝詞

篠川定吉　士族

田手喜右衛門　同上

神武創業、統垂萬世、於我皇帝、丕緒纘繼、風夜亹々、萬機匪懈、小心翼々、以御海内、其徳不爽、其恩無遺、露霑草樹、瀼々維滋、無偏無陂、澤洽四陲、億兆欣々、懐其仁慈、鸞輿出狩、問民疾苦、白首黄吻、靡不歡舞、僻陬之民、難仰袞黼、天開以還、始觀歯簿、於戯皇恩、渺如河海、維我微臣、浩恩是被、令伏輦下、感喜交至、不知所報、且懼且愧、唯禱上帝、我皇健強、壽考榮福、永張乾綱、上帝至仁、必佑我皇

佐藤尚平　佐沼駅商

半田又右衛門　同上

小民某々等、鳳輦ヲ迎ヘ、皆欣々然トシテ喜色面ニ溢レ、相謂テ曰ク、嗚呼吾天皇、疾病ナキ歟、何ヲ以テ能ク巡狩シテ、民ノ疾苦ヲ問フヤ、嗚呼此僻遠ノ地ニシテ、鳳輦ノ過ルニ遇フハ、開闢以来未タ曾ツテ之有ラザルナリ、而シテ今小民等、天顔ヲ仰グヲ得ルハ、何ゾ其幸ナルヤ、又幸ノ幸ナル者アリ、何トナレバ、陛下恭倹仁恕ニシテ徳輝四表ニ光被シ、恵澤八荒ニ霑濡シ、僻陬ノ小民等、猶罔極ノ鴻恩ヲ蒙ル、幸ノ幸ナル者ニ非スシテ何ゾヤ、今輦下ニ拜伏シ、歓喜交至リ、言フ所ヲ知ラズ、唯祈ル、陛下永ク上帝ノ護佑ニ因リ、榮福壽考ニシテ億兆ヲ覆育スルコト、太陽ノ坤輿ヲ照臨スルガ如ク、透徹セザル所ナク、小民等モ亦、上帝ノ眞理ヲ守リ、遺失スル所ナク、永ク陛下至仁ノ鴻恩ヲ奉戴センコトヲ、小民佐藤尚平、半田又右衛門、等同志ニ代リ、誠惶誠恐謹テ祝詞ヲ上ル、

村上　慥　高清水村農
加藤雄之助　同

小民、村上慥、加藤雄之助、同志男女ニ代リ、鳳輦ノ下ニ伏シ、誠惶誠恐謹テ祝詞ヲ上ル、遠方卑賤ノ小民等、前代未ダ曾テ之アラザルノ盛時ニ遭ヒ、親ク玉体ヲ仰グヲ得ル、何ノ幸カ之レニ如カン、歓喜交至リ、鄙懐言フ所ヲ知ラズ、唯祈ル、陛下、萬福壽考、造物真神ノ佑護ニヨリ、小民等モ亦永ク陛下覆育ノ恩沢ニ沐浴セン事ヲ、今鳳輦ヲ迎ヘ、欣喜ニ堪ヘズ、自ラ卑賤ヲ顧ミズ、敢テ萬歳ヲ呼ビ、謹テ奏ス、

上古ヨリ威勢赫々タル、日本人民ノ統御ヲ上帝ヨリ授與セラレシ最至尊ナル日本天皇陛下、今ヤ奥羽地方御巡幸ノ際、本日宮城英語学校ヘ臨御アラセラルルヲ以テ、本校教諭ノ任ヲ負フ英国人臣リツトル、謹テ祝詞ヲ奉呈ス、

宮城学校教諭英国人　ヘンリー、リツトル

仰陛下、本校ヲ建設シ玉ヒ、日本人民ノ幼者ヲシテ従学セシメ、知識ヲ開キ、以テ益々教育ヲ隆盛ナラシメントセラル、其徳沢大ナリト云ベシ、今リツトル職トシテ少年輩ノ進学ヲ助クルハ、恰モ種ヲ蒔クニ異ナラズ、後来其結果夥多ニシテ大ニ日本国ノ利益ヲ興起シ、陛下ノ栄ヲ洪大ナラシメン事必セリ、是臣カ日夜勉励懇望スル所ナリ、而シテ陛下、本日本校ヘ臨御アラセ玉ヒ、臣等ニ拜謁ヲ賜フハ、本校ノ面目ニシテ、臣ノ栄誉亦大ナリ、故ニ謹テ此恩恵ヲ謝シ、併セテ皇統連綿タル、日本天皇陛下ト博学多能ノ皇后宮ノ聖世、萬々歳タラン事ヲ希望ス、

日本天皇陛下、今茲明治九年六月、奥羽諸国ニ御巡幸ノ途、宮城英語学校ヘ臨御アリ、拜謁ノ賜ヲ辱ウス、亜国人臣グールド、深ク感謝何ノ栄誉カ之レニ如カン、因テ祝詞ヲ上ル、

宮城英語学校教諭亜国人　チャールス、グールド

今ヤ陛下、至聖至仁、益々教育ノ道ヲ隆盛ニシテ、俊傑ヲ発生セントス、是実ニ教諭ノ職ヲ肩荷スル人民タルモノモ亦豈刻苦勉励シテ以テ皇恩ノ萬一ニ奉答セザル可ケンヤ、仰ギ望ラクハ北巡ノ駕連綿タル天皇陛下ハ長生シ玉ヒ、人民ハ愈聖明徳化ノ幸福ヲ蒙ラム事ヲ謹テ祝ス、

これは吾君弘く物学びのみちを聞かせ給ふと、外国の博士等をめしつどへて、ところところの学校の教師となし玉ひけるか中に、この県の師範学校の教師なる、英吉利須、亜米利加、の国人等、このたびの行幸をかしこみ奉りて、かく祝詞を奉れるなり。そもそも高麗人王仁が、浪速津のうたをよみて、そのかみの帝をたたへ奉り、いまこのふたりが、祝詞を上りて、こたびの行幸をことほぎ奉るも、ともに大御国の民草にあまれる御恵の露、とつ国人のたもとにさへかかる嬉しさをつつみかねたるわざなるべし、されば

この祝詞も、かの歌とともにとほく後の世に伝はりて、この大御代をしたひ奉らんはさらなり、この学校の生徒らの、おのおのその業をまなびとげて、皇国の鴻益をおこしてこの大仁恵にむくいまつらむ末さへはかりしられて、いとも嬉しく、いともかしこくなむ。

埋木廼花巻之下

岩手県

小原實風　和賀郡谷内村平民

皇祖の、神の命と、神代より、明御神の、しろしめす、皇ら御国に、国はしも、あまたあれども、島はしも、多にあれども、玉鉾の、みちのおくとし、おへる名の、しるき国へは、天雲の、遠きむかしは、千早振、荒振蝦夷し、住なせる、国にしあれど、御代々々の、大御恵に、あら玉の年ふる随ま、国民の、醜鄙ぶりも、やゝやゝに、雅ひにかへて、真杖つく、翁も嫗も、はまつきて、あそぶ子どもも、大命、かしこみ奉り、いささけも、たがひまつらず、大御代を、聖の御代と、かしこけど、称へ奉りて、あさよひに、しぬび奉れる、やすみしし、吾天皇は、かかるこの、国形のみか、御民らが、其なす業を、菅の根の、ねもころころに、見そなはし、きこしめさむと、たふときや、大みみづから、かがなべて、やそかの御幸、山阪も、いとひたまはず、にこ赤土も、悪みたまはず、御輦の、音もさやけく、いでたしし、大宮人は、雄々をしく、駒うちなべて、大御供、仕へまつりて、御幸道の、県々に、何くれの、いそしみ高く、いさをある、人らをめざせ、尽せりし、そのいさをしを、めでたまひ、めぐませ玉ふ、大御幸、拝み奉ると、岩橋の、まぢかきむらは、更科や、さらにもいはず、雲のゐる、山の背面の、里々も、老も幼も、おのがみの、尽すかぎりを、清まはり、ゆまはりしつつ、御幸道の、みちの真砂を、ふみならし、つどひに集ひ、御輦を、をろがみ奉り、大御世を、千世よろづよと、ことほさき、ほさき奉りて、御民らは、あな嬉しやと、うちゑまひ、かたみにいはけ、洲木島の、やまとこころは、神代より、かくこそあなれ、かしこみて、ことほぎまつる、高御くら、天つひ嗣と、しろしめす、天の下にし、かがやかす、大御恵の、大御影、木蔭ももれず、隈もなく、いでり通れば、民草の、いやさかはえて、千萬の、国とふ国に、充香る、七重花さく、やへ花さくと、

短歌

例しなきみゆきかしこみためしなき聖の御代とことほぎ奉る

大御世のさかえも諾なまごころに仕へまつらすまへつ君たち

菊池　武　盛岡飼曾小路

しきみてるみゆきの道のさざれ石の巌とならんかぎりしらずも

ふせいほに大御輦をかけ巻もかしこきみよに逢にけるかな

これは此武の家を行宮とせられければかくはよめりけん。

この人常に物産を開きものすることをつとめいそしみ、はたその行ひもまめなる人にしありければ、特旨をもて大御前にめしいだされ、右大臣をして其いさををなむ誉させたまひける。

議官　黒田清綱

ためしなき御幸にあひて塩がまの浦のけぶりも立やそふらん

みちのくのそこの濱松ふく風にきこえあぐらしよろづよの声

教部権少丞　土持綱幸

みちのくのいはて思ふのさと人もよろづようたふ大みゆきかな

式部寮八等出仕　木場清生

ためしなきけふのみゆきを誰てしてかきつくすらむつぼのいしふみ

みちのくの籬が島をけふよりはみそのものとみそなはすらん
まつろはぬ国しなければ君が代はなこその関も名のみ成りけり
内務省九等出仕　福崎季連

みちのくの忍ふのもりの郭公名のり出てやみゆき待らむ
みちのくの外の浜べによる波も君がみるめにもれぬ御世かな
東京府中属　垪和爲繼

くまもなくてらす日かげに松島の松もちとせの色やそふらん
東京府中十等出仕　指宿近春

みちのくのあだちが原の末までも恵みの露のあまるみよかな
和田磐春　鹿児島県士族

いつしかと雲ゐあふきてみるめかる海人やみゆきを松か浦島
草野隆道　同上

時をえて今そさやかに名のるらんなこその関の山ほととぎす
音無盛臣　和歌山県士族

大君のみゆきをかねて松島はかからむ折の名にこそありけれ
宮内省十等出仕御歌掛　渡　忠秋

水の花の雪ふみわけて白川の関のふる道誰かこゆらん
外国のこがひのみちもみちのくの広き桑野にひらけけるかな
いにしへの影さへ見えて浅香山いまもすむらん山の井の水
例しなきみゆきかしこみ秋萩も夏やさくらむ宮城のの原
みちのくの野田の玉河雨すきて蛍飛かふかげのさびしさ
奥の井や都じまへのほととぎす都恋つつだれかきくらむ
みちのくの外の浜への汐貝も大みけにこそつかへまつらし
渡忠秋妻　後瀬子

みちのくの忍ふの岡のほととぎすみゆき待てや鳴わたるらむ

六月二日みちのくにいでましたまふをかしこくもをろがみ奉りて

皇学御用掛附属　安部眞貞

掛巻も、あやにかしこき、現神、吾大君の、天の下、八島の中に、陸奥と、出羽の国は、鄙ざかる、国にしあれば、国がらを、見そなはさんと、神随おもほすなへに、ひむがしの都を出て、武蔵野を、遠ざかりまし、下総の、古河のわたりに、御車を、とどめたまはば、其川の、瀬々の若鮎も、大御饌に、つかへまつらむ、下野の、二荒の山に、大御旨を、とどめたまはば、その山の、神の貢と、躑躅花、かさしか持ん、白川の、関こえまさば、白妙の、絹垣よそひ、紅花も、君をやまたん、信夫山、御狩たたさは、夏野ゆく、男鹿も出て、大前に、膝打ふせむ、松島の、雄島が磯は、有かよひ、みしたまふとも、御こころに、あきたまはめや、塩竈の、籬のしまは、ありたたし、みしたまふとも、今のみに、豈差めやも、朝なぎに、来よる深海松、夕なぎに、なびく股海松、またみるの、又もいでまし、深みるの、深めてみたせ、宮城野に、いゆきいまさば、早萩は、錦敷なし、白露は、玉したくまにま、御侍、おもひ解けつつ、伴の部は、舞てあそばむ、青森の、県みまさば、新葉は、茂りさかえて、早苗はも、生ひたつまにま、婦女の、蠶飼も富みて、田人等も、豊けかるらん、事なくて、楽しき御代の、楽しくて、事なきみなと、山彦の、答へむ極み、谷蟆の、さわたるきはみ、かしこくも、国巡りまし、尊くも、国みあそばし、速けく、事竟まして、平らけく、帰り来ませと、天神、仰ぎこひのみ、地祇、伏てこひのみ、斎ひて待む、

歌道御用掛　松平忠敏

高照る、日のみこ、遠長く、いやつぎつぎに、しろしめす、大日本国、天離る、鄙の果てまで、遠つ神、吾大君、いにしへに、なかりしことも、み心を、あづまの都、よろしくも、思ほしただし、いでましの、みちの国々、山川も、きそひあらそひ、よりきつつ、

みめぐりまさん、其みちの、前に後へに、うちつどひ、もちわけませる、いさをしも、差したまひて、此度の、行幸かしこみ、おのもおのも、仕へまつらむ万世までに、
さらにまたこがねの花も咲はてて行幸待らんみちのくの山
顕はれて世にや出らむいでましにあぶくま川のせぜの埋れ木
みちのおくいてはの果も出ましの光にあたるあたら御代かな

此黒田清綱はじめの哥どもは、都なる友だちのもとよりたよりにつけておこせたりけるを、この県に御輦とめさせ玉へるほど、行在の御心なぐさめ奉らんと御覧ぜさせ奉れるなり。さるは行幸をしたひ奉る真ごころを、所がらなる海山によせてうたひ出たるがとりどりをかしう、中々に御供つかへまつりてまのあたりさる実景に臨めらん人々は、おもてふせつべくなん。

奉祝奥羽巡幸　　岩手県六等警部　清原宣道

鳳輿北発好何修、一予一遊政化周、門幟飜風朝日出、軒燈連影夜烟浮、天恩曩被薩肥国、聖沢今加奥羽州、率土王臣挙応祝、皇基不動機千秋、

陸奥の岩手の山もぬかつきて拝みまつらむ君のいでまし
こたび行幸ををがみ奉りていともいともかしこけれど大御代をことほぎまつりよみてたてまつる　　真清

ふりはへてみゆきすらしも陸奥のみちのおくさへ道しある世は　　平井要蔵　郡山

陸奥のいはてにかかるみゆきにも年のなしるくおもほゆるかな

御巡幸を拝みて　　田中館藤蔵　三割村

陸奥のあさのさころもきる民もけふのみゆきに袖よそひつつ　　島川竹介　士族

草木さへ恵みの露にうるほひてみゆきの道になびかぬぞなき
鳥が啼あづまのおくの細道も開くる御世のみゆきなるらむ　　江剌家莱山　同上

天離るひなにも君のいでまして弘きめぐみを国にしくらむ
山深き岩手のさとも天つひの光りいただくけふにもあるかな　　上田就将　同上

ひなにすむいやしきみすら幸ありてあきつ御神ををろがみにけり
言の葉にいでていはての山つみもけふめづらしきみゆき待らむ　　本堂親知　同上

陸奥のあを人草もすべらぎのめぐみの露にうるほひにけり
おもひきや都もしらぬ鄙人のけふ御鳳輦を仰ぐべしとは　　国分閑吉　平民

あまつひのめぐる光りののどけさにうきたる雲もなき世なりけり
みちのくの民すら恵をろがみてうまれしかひのある世をぞ思ふ　　太田　孝　同上

馬くるまよそひたづして天ざかるひなのなか路をめぐりますらん
かかげつるひの大御旗まばゆくも大みひかりをあふぐけふかな　　二見清六　同上

時わかぬ岩手の山の山おろしけふふくこゑはよろづよのこゑ
御輦のみちのかたへにふす賤も嬉しきみ世にめぐり逢けり

大駕巡幸岩手県恭賦　　三等修撰　廣瀬範治

南風解慍旭幡翻、衆庶欣々迎至尊、須釆葑菲供御饌、不容筐篚答天恩、柔桑一路養蠶国、芳艸千年牧馬邨、更泛龍舟臨北海、如今陸羽是中原、

武藤愛治　岩手県士族

維時仲夏一天晴、鳳輦向東發帝城、日月清昭無遠近、人心孰不爲之傾、

奉拝鳳輦巡幸

高梨波右衛門　胆沢郡前沢村平民

跡多禹王績、徳絶帝堯仁、聖世眞隆治、遥々鳳輦巡、
天津日のめぐるかたより民草も恵みの露に色増るらん

伊達雄峯

鸞駕堂々發帝京、奉迎無處不歓声、堯天舜日何須説、只合謳歌唱太平、

五味玄鶴

沛然膏雨洽辺隅、洋溢恩波無處無、大早雲霓望初遂、寒村菽麦一時蘇、

今野専左衛門

明兼日月照辺陬、澤與滄溟霑八洲、振古未聞東奥地、太平天子有巡游、
おもひきやみちのく山のふもとにて高き雲ゐの月をみむとは

阿部祐吾

拝観鳳輦過、感涙不堪多、豈只甘棠頌、満郊撃壤歌、

卓地廉平

鳳車巡幸西東、文命敷来四海同、到處黎元頌聲湧、普天今日太平風、

今野毅一郎

開花餘風及畢陬、普天之下拝巡遊、如茲盛事休言比、隆治何慙六大洲、
天てらす神はうちとの隔なき露のめぐみにしげる民くさ

佐藤喜平

日章旗映旭光明、萬里江山競奉迎、鸞駕拝来多感涙、無量恩澤及蒼生、

及川健治　胆沢郡前沢村平民

旭日朝時東奥間、錦旗映處拝龍顔、浴来徳澤深於海、仰得仁恩高似山、

御巡幸を拝み奉りて

佐々木亮輔

およびなきみにしもけふはあふぐかなくまなくてらすはつひの影

高梨金治

近歳巡遊西又東、奉迎高唱太平風、腐儒休説唐虞治、看取神州今日隆、
山光水色日維新、天上旭曦下影辰、聖徳頌聲聲満野、祝来眉壽幾千春、

大内折三郎

謳歌撃壤賀同仁、今日何図玉輦巡、満野人民感将泣、天恩波及奥東濱、

阿部九十九

邉陬亦何幸、親拝鳳輦巡、喜極多流涕、只言天日眞、

及川平治

羽衛堂々發九門、錦旗整々映乾坤、且歎恩沢邉陲遍、草莽拝観満乗尊、

佐藤輔治

仁風郁々日維新、恩沢洋々遍率濱、隆治故爲未曾有、鳳車得々問黎民、

上飯坂宋平

仰見太平気象真、何論舜徳與堯仁、率濱悉是蒙餘澤、鼓腹謳歌楽土民、

遠藤金平

あさひさすめぐみの露にいろそひてみちのおくまでしげる民くさ
岡崎五郎

行幸ありてこのみちのくの民草も恵みの露にうるほひにけり
白井吉右衛門

ほどとほきあづまのはてに大君のみゆきをあふく民ぞうれしき
杉目養右衛門

みちのくのはてものこさぬ大行幸かしこきみよのしるしなりけり
高橋武右衛門

九重のくも井はるかにあふぎつつみゆきをいつとまつ島の月
武田太郎八

めぐみ深きみゆきなりけり鳥が啼あづまのはてもみそなはしつつ
半田東吉

思ひきやみちのく山のおくがまで深きめぐみの御代にあはんと
さよ子　佐藤儀四郎母

いつしかと行幸をここに松島やめぐみの風にあふぞうれしき
いせ子　高梨波右衛門母

世にしらぬ木のしたかげの浅ぢふにかかる恵みの露ぞうれしき
きね子　前同人妻

みちのくにいま一たびの行幸あれといのるこころは神ぞ知らむ
高梨金治

草も木もみなおしなべて大君のみゆきをいかであふがざらめや
わがすめるさとの家つづきなる処を行在所とさだめられければ嬉しさのあまりに

おもひきやわがすむ鳥のうき巣にも雲井の月のやどるべしとは
黒沢尻学校教師　齋藤良右衛門

御巡幸を詠み奉る歌

千早振神の御世にもきかざりき末の松山こえまさんとは
清水喜七　平民

鳳輦のめぐるけふとて大御世を岩手あがたにいはふ民くさ
芳野庄八　同上

大君にめではやされて陸奥の野田の玉川光こそませ
吉田栄治　同上

をさめます道も開けて陸奥のおくのおくまでめぐる鳳輦
三島桂蔵　同上

みわたせばみゆきの御旗うちなびき岩手の山は花さきにけり
とめ子　同上菊池氏

陸奥の千賀の塩がまちかかれどけふの御幸を待ぞこがれし
関　善次郎　郡山駅

浪速津のむかしもかくや大君のめぐみの露になびく民草
かしこさのかぎりしられず天てらす神の御末の御子のみゆきは
関　清五郎

いでましのけふのみゆきに人草の月にひにけに新まりけり
かしこきやあまつひつぎの大君の鄙のはてまでみゆきせんとは
伊藤常次郎　同上

ためしなき君のみゆきに陸奥のしづか伏家も賑ひにけり
栗谷川武貞　同上

あまざかる鄙にゐながら大君のけふのみゆきをみるぞかしこき
くもりなき月日の影とあきらかに君のみゆきをあふぎみるかな
物いはぬ草木もけふはおしなべてみゆきにふさぬかげだにもなし
関　吉五郎　同上

おほきみの御幸をろがむ人皆のけふのこころを何にたとへむ
木村佐五郎　同上

開けゆく御世ぞとなしき三重なもみゆきはいつとひを数へつつ
数ならぬしづのをわれも友集へけふのみゆきをあふぐかしこさ

久保田與三郎　花巻駅

久方の日の大御子のみゆきにぞいともかしこきみよはしらるる

陸奥の国の御幸のけふよりはひらけてなびく四方の民草

郡山駅中学校の生徒らが松原の中にたちて御輦をむかへ奉る
をみて

津田永胤

大君のみゆきいまやと松原にむかへ尊とむさとのわらはべ

これは藤田駅にて士族とおぼしき男、あるいへにて鴨居へ
ものを掲げ、うやうやしく御車を拝みゐたり後にとりいで
てみればかくなんあるしとそ。

羽根廣明

ゆたかなる御世もしられてえぞが島ちしまの果にみゆきますなり

こたびの大御幸をかしこみて拝み奉る事を

駒形神社宮司　遠山虚舟

おもひきやわが大君のいでましを岩手あがたにあふくべしとは

古しへのえみしといひし陸奥も君いでませば都なりけり

巡幸親労萬乗躬、内綏區宇外和戒、山川改色恵風遍、草木益栄恩露蒙、今日僻陬稍開化、昔時獷俗盡冲融、微軀因遇維新世、仰見神功聖徳隆、

同上権宮司　高平真藤

開けゆくみひかりみえて日の経にめぐりいでます陸奥の空

うちつ国千島のおくもとつ国も御いつあふがむいでましぞこれ

同上禰宜　佐藤正孝

ひらけゆくみちのおくがに大君のいでますけふにあふぞ尊とき

大御代の民はぐくますいでましをあふげはとほきいにしへおもほゆ

同上権禰宜　豊原一夫

まさめにもけふこそをかめ真清鏡かけてあふぎし君が御幸を

なびきふす四方の民草けふは又ためしことなるみゆきにぞあふ

同上　澤田穂国

やすみしし吾大君のいでましをいまのをつつに仰ぐかしこさ

橿原に御世しらしけむ昔さへ君が御幸にしのばるるかな

駒形神社神官

掛巻も、あやにかしこき、明つ御神と、大や洲国、知食す、このあたら大御世の、いかし御世の、おほき御稜威の、御光りはしも、天つひの御影、遍く天の下にい照徹らすがこと、大坐すがらに、千萬のあだし邦人も、諍を重ねて来集ひ、慕ひむつび奉ることは、更にもいはず、ことさへく韓人等は、わきてその御勢ひをおぢ畏みゐやまひつつ、古へ棹楫ほさす参来て貢献りし、こにさしか世の例にたちかへり、数たの方物捧げてつかへまつろふ時になもあれば、大皇国内、いよよ日にそへて新に、年月にしたがひて開けゆきぬべく、経営みたまふなべに、辱くも大御躬づから、御輿たたして、鳥か啼東のはて、これの陸のなかつ国より、奥つくにの津軽のひな境に至るまでも、陸路周くめぐりいでまし、そがありさまをみそなはし、大御宝共を、撫愛みたまふなるは、いとかしこしともかしこくなもありける、かれ久方の雲ゐ遙々に想ひやり奉りしかた邉にして、古へためしなきこの大御幸にしも、遭奉ることを、いともうれしえ歓ぼひ、てのまひ足のふむしらに、立走りて、おのか業々いやつとめにつとめ、いやはげみに励みいそしみ、あしびきの山田さと田におりたちて、手肱に水泡かき垂り、向股に泥かき寄せ、真いはのさなへ植とううるはじめよりしも、ことしのみとしの八束垂穂の豊の秋しるきたらし御世の大恩をかがふり、はた天傳ふひの経緯に、開けゆく皇国内に、生りとなりいつるくにつものはしも、新葉蠶の、夏ひきの糸もふすさにたり

整ひ、前の学びのみち弘く成りゆく、うまし御世のおほ御かけによそる事をし幸へのきはみとは尊び奉るまでにみおもむけなもいたりぬるはや、ここをもていでます道の八街掃ひきよめ、かりの御坐所まけいとなむと、みたみ等が、夜とひといはず、弥進みにすすみきほひていそはき仕へ奉り、をちこちの里もしみみに、老人も、小人も、いよりいどひて、大みゆきを待迎へ拝奉れば畏きや、みそなはすおほみこころに、めぐしともあはれとも所思食さんかも、然りゆきいたります、みちの便りに御使たてまたし、大御言のらすれは、天つ社、国つ社、と鎮坐す大御神たちも、夜守日護にまもらひまして、御船路も安けく平けく、遠幸さむこたびの大御幸はしも、天壌のむたかぎりもあらぬたなかの大御世の行末、弥遠にいや廣に、常磐堅磐に栄えまし、御光いよよ千島のさきよりとつ国々にかがやきぬべきはじめにして、いともめでたき大御幸となも仰奉り、あなたふとあなおむかしと覚ゆるまにま、其たもえあらずてかしこみかしこみも、称辞まをし、寿詞きこえあぐるものは、陸中国なる、駒形の神社にさもらへる、神官等なり、

青森県

よみ人しらず

足ひきの山した水を汲あげて吾大君に御茶たてまつる

これはある翁、末の松山のふもとにわき出る清水のいと清く冷かなるをくみながら、かくはよめりとなん。此うたいささか作意をかへず、結句常語を用ゐて、をさなくもいひすゑたるが、中々にあはれ深く、さるはしたなきところに住なすらん人の真心、言外に匂ひて、うちききより先みにしむめり。こはさる折にふれてうちいでし嗟歎のこゑにしあれば、おのづからしらべめてたく、姿さへけだかく、古しへの歌にも、をさをさおとるましう、中々に後世の哥よみなどの、かけても及ぶべき境にあらずと、ひとり心に感じけるが、京にかへりのぼりてのち、友なる渡忠秋に語りければ、おなじ心にめではやして、久方の雲のうへまできこえあげし山した水のおとのさやけさとよめりしは、げにさる事にこそ。

北巡歌并引

廣澤安任　士族

明治九年六月二日、車駕發東京事北巡、七月十二日、到三本木駅、有命放余牧牛馬供天覧、余惶怖奉命、竊顧此行不知其深意所在、然而叡覧及余賤業者、豈一野臣之栄哉、必将有従此一新視聴者、於是欣々然賦蕪詞云、

外事略整理、内治須投機、其間不容髪、六騑向北飛、古来無此挙、久牟阻皇輝、日月不遍照、雲霧看靡披、膏澤所降下、洽被草莽微、野人伏在牧、々蓄未全肥、洋客来輔業、耦耕相因依、営々径五載、日々々暮歸、非敢不黽勉、只耻名實違、謬瀆侍臣聴、咫尺犯尊威、此栄豈唯我、與物偕発揮、造化不羈絆、裁成在先幾、苟則天行健、何患人事非、

行幸を拝み奉りて

青森県十等出仕　佐藤　復

あまざかるひなの里人けふのみは都にすめるここちこそすれ

渡部敏鎌　士族

御車とともにいたらぬ隈もあらじわか大君の広きめぐみは

園部貞範　同上

いでましの大みめぐみに報はんと心をたれかつくさざるべき

動きなき世をしろしめす大君のみゆきや神のこころなるらん

大君の行幸のみふね待うけて吹も静けき外の浜風

青森の小学に臨幸ましましける日教員の数にいりてことほぎ奉れる

小学教員　両角衛門

天つ日の学びの窓にさしいりて開くるふみの道ぞかがやく

同上　伊関鉄之助

かりそめの玉の御座の光りよりまなびの道やいとど開けむ

青森県第十六中学区七戸小学教員（七戸小学教員）等不逮任ヲ教導ノ驥尾ニ辱ウス其職ニ在ル己ニ数月茲ニ奥羽巡幸ヲ奉賀シ庸劣ナル祝辞ヲ上ル

同上　齋藤楫夫
同上　中村至
同上　大芦梅光女
同上　高橋熙光
同上　植西居完
同上　梶川喜代女
同上　高田則孝

嗚呼偉ナル哉、英智聡明ナル天皇陛下ノ、撫恤ヲ垂レ、九重垂簾ノ至尊ヲ出テ、自ラ櫛風沐雨シ、以テ萬民ノ疾苦ヲ問ヒ、以テ衆庶ノ事業ヲ勧奨シ、所謂東奥ノ偏陬モ、邦土ニ非サルハナク、鄙野ノ頑児モ、亦臣民ニ非ザルヲ得ンヤ、是我古典中未曾閲ノ盛挙ナリ、此無涯ノ天恩ヲシテ、永ク頭脳ニ記憶セシメント欲ス、因テ今男女生徒三百餘名ヲ率キ、遥カニ鳳輦ヲ奉迎ス、親シク聖顔ヲ拝シ、抃喜欣々トシテ、手舞足踏ヲ知ラズ、恩波洋々トシテ、胸中ニ溢レ、言ハント欲シテ言盡サズ、請フ顯官忌憚スル無クンバ、此上表ノ意ヲ奏セラレヨ、恐誠謹言、

謹奉祝鸞輿巡幸

（青森県等外一等出仕）　中塚　常

皇紀二千五百年、鳳輿初到奥州辺、謳歌萬歳況今日、雲裡龍顔拝目前、

手塚元瑞（士族）

雲蹕駸々臨奥東、奥東新似奥天通、鑾輿遥映岩城雪、儀衛除追合浦風、草色到頭承寵眷、頌聲髄處入宸聡、斯榮豈啻辺陬幸、威徳将輝萬国中、

今　敬一（同上）

普天之下総王民、鳳輦親臨率土濱、豈啻徳威施異域、仰看避邇沐同仁、明時盛挙無前典、僻境榮熙不盡春、謹擬嵩呼裁祝句、蜻蜓州尾一徴臣、

小学訓導　土岐八郎

天皇陛下北巡ノ日、龍駕青森小学校ニ遭逢シ、千古未曾有ノ盛儀ヲ仰ク事ヲ得タリ、校舎ノ光榮、生徒ノ幸福、何ヲ以テ之ニ加ヘン、豈独リ青森小学ノ光榮而已ナラン、管下一般生徒ノ幸福、之ヨリ益々多カラントス、臣等衆教師ト共ニ、天皇陛下ノ萬壽無彊ヲ祝シ奉ル、

奉祝製皇東幸表

工藤覚蔵（十八年）

誠惶誠恐謹言、維茲六月鳳輦發宸居裏、越七月始狩干陸奥草莽之地、率土之民歓欣無極、伏惟聖皇陛下、以天祖之遺體、照臨四方、励精圖治、愛養蒼生、一新大政、克明俊徳、以寧天下、俊偉之聲、轟干四表、億兆之民、延領而望、猶且不安、親茲巡視、高臺之詠歌、寒夜之脱衣、倶試竝嘗、避陬地始得遂渓后之望、開闢以来所未曾有、布衣覚蔵、在草莽中聞此盛事擧、兼行并程得拝儀衛、不堪欣歓踴躍之至、謹奉表以聞稽首稽首、

奉祝東巡

小山内暉山（士族）

年維明治、慶雲爛然、六龍東幸、駐蹕青湾、鴻恩深高如山如海、華封嵩呼、聖壽萬載、

弘前公立小学教員　工藤主善

惶恐謹言、維茲六月初二、龍駕始發九重、越七月中澣、幸陸奥海隅、駐輦三宿、賚耆老、試学生、卒土臣民、歓抃無涯、伏惟皇帝陛下、承列聖之丕績、会中興之昌運、明々臨下、励精圖治、登用俊人、一新庶政、英偉之聲、轟干海内、億兆莫不歓心翹首以望太平、而猶且弗寧居、軫念黎甿、経歴険艱、鸞輿遠臨避陬、自乾坤闢而来所未曾有、微臣在十里外、聞此盛時、雖不獲奔走称慶輦下、無任欣歓踴躍感恩傾葵之至、謹奉表以聞頓首頓首、

率土幸遭河水清、六龍飛脚沸歓聲、徴臣差闕消埃報、聊傚華封祝太平、

同上　浅利直之助

時属康哉荷聖恩、共歓風化遍乾坤、龍車北地巡行日、清掃路塵迎至尊、

同上　傍島正郡

鸞輿北巡、維水維陸、赫如太陽、光輝艸木、聖化風薫、天恩雨沐、億兆歓迎、鳳儀穆々、

同上　小林朝五郎

聖明陛下、蕩々ノ徳ヲ以テ、萬化ノ源ヲ総ルヤ、熈々トシテ庶績コレ挙リ、雍々トシテ醇美ノ俗ヲ成シ、巷歌野抃、億兆、命其所ヲ得、其業ヲ楽ム、是明治ノ號、名実相称フ所以也、此時ニ際シ、猶戦々又兢々、絶険ヲ喩エ、奇岨ヲ踏ミ、東隅避僻曠寞ノ地ニ巡幸セラレ、耆老孝悌力業ノ者ヲ訪ヒ、之ヲ慰勞ス、鳳輦過ル所、甘雨ヲ敷キ、恵風ヲ来シ、民僉領ヲ延ヘ之ヲ望ム、恰モ幼子ノ慈母ニ於ルカ如シ、況ヤ吏治ノ能否、民間疾苦ノ如キ、親ク聖覧ヲ経ル所、鳳輦闕ニ帰ルノ後、更ニ精ヲ励キ、治ヲ圖リ、廟謨深淵、仁政日ニ施、義刑月ニ發シ、生霊益々皇恩無究ノ澤ニ沐浴スルアラン、於戲古今未曾有ノ盛典、誰カ之ヲ欣頌セザランヤ、於茲感泣措ク能ハズ、敢テ肝胆ヲ吐露シ、謹テ之ヲ奉職ス、

同上　清水滴石

伏シテ惟レバ、神聖文武皇帝陛下、列聖ノ丕緒ヲ承ケ、忠孝ノ大業ヲ開キ、徳ハ五三ヲ兼ネ、恩ハ禽獸ニ及フ、人ヲ用ル惟賢、既ニ門地ヲ廃ス、俊介官ニアリ庶績咸熈ル、馬車ノ磷々タルモノハ、國歩ノ進ムヲ昭ラカニスル也、電信ノ忽々タル者ハ、人智ノ開クルヲ表スル也、読書ノ聲ハ三戸ノ村ニ起リ、開花ノ士ハ十室ノ邑ニ出ヅ、山ハ諸鑛ヲ開キ、海ハ巨船ヲ繁ク、制造ノ局巋然トシテ高ク聳エ、済生ノ院奥焉トシテ互ニ輝ク、人ニハ自立ノ権アリ、物ニハ晨仰ノ弊ナシ、金貨ノ腰ニ重キヲ嫌ヒ、楮幣ノ懐ニ軽キヲ貴ブ、佩刀ニ換ルニ忠信ヲ以テス、濶袖ヲ解キテ便衣ヲ穿ツ、此豈明治ノ極功ニアラスヤ、聖上民ヲ視ル未タ治ラサルカ如ク、敢テ九重ノ深キニ安ンセスシテ、四裔ノ遠キヲ巡視ス、往年鎮西、今茲奥東、孝子ノ閭ニ表シ、忠臣ノ墓ヲ封シ、功勞ヲ奬励シテ、耆老ヲ慰籍シ、時雨ノ降ルガ如ク、歓聲洋々タリ、抑モ青森ノ地タル、北ハ松前ヲ控キ、南ハ羽州ニ接シ、山河清秀、田野肥沃、所謂天府、実ニ北門ノ鎖鑰タリ、而モ率土ニ僻在スルヲ以テヤ、紀元以来二千五百余年ニシテ始テ斯盛挙ニ遭フ、衆庶ノ喜ビ何事カ之レニ如ン、微臣豈嵩呼華祝ニ傚ヒ雀躍抃舞ニ止ンヤ、因テ聊カ蕪詞ヲ綴リ謹テ奉祝ス、誠恐誠懼百拝、

雨歛軽塵馳道浄、家々日旆閃風斜、厳城幸代萬人喜、高展翠眉迎鳳車、

同上　黒瀧儀任

三千年来聞神器名、今歳何幸親拝鑾旌、移風化俗物錫光栄、抃野舞巷人起頌聲、萬姓何以祝我聖明、舟車所通無遠不傾、

区長　大芦顕三

青森県第七大区々長兼学区取締臣大芦顕三曩時ニ廃藩置県ニ方リ県吏ノ伍ニ列ス、尋テ第七大区々長ノ職ニ在リ、前後四周年ヲ過グ、今聖上寵恩ノ深キヨリ出テ偏遠ヲ避ケズ、沃野ヲ撰マズ、東奥青森県ニ巡幸ヲ忝ウス、茲ニ明治九年第七月十二日ヲ以テ、区内七戸駅ニ鳳輦ヲ駐メ、親シク黎庶ノ疾苦ヲ問ヒ、無前ノ厚恩ヲ敷ク、此古来未曾有ノ僥倖ナリ、誰カ慶賀感戴セザラン、後来公布ノ以テ愈々通徹シ、成規ノ以テ愈々遵守シ、以テ開明ノ化育ニシン進歩センヲ願フ、之レ区内一般人民ノ裏情ナリ、臣顕三職区長タリ、故ニ区内四万五千ノ部民ニ代リ、謹テ祝辞ヲ奉ル、恐惶誠恐謹言、

行幸ををろがみ待りて

熊野神社祠官兼少講義　長利仲聴

道のへに立つらなりて大君のけふのみゆきをあふぐかしこさ
鳳輦のめぐるまにまに道といふみちは開けて国さかゆらし
折しも暑さの堪がたう待りければ
大君の御袖涼しく吹かよへゆきよりおろす岩木嶺の風
雪をけりあるくをみて
夏深き岩木の山のいはがねにのこれる雪もみゆき待らむ
青森港にて競馬を叡覧ましましけるをはるかにみ奉りて
君ませは外の濱べのあら駒も雲井をかける心ちこそせめ
ひならずして還幸あらせられ玉はむよしうけたまはりて
御車をとどめてしばしみそなはせ外の浜浪いはきねの雪
七月十六日のあした箱館にわたらせ給はむと大御船にめさせ給ふをはるかにをがみまつりて
海原にてりかがやきぬ朝霧の戸はりかけて出る光は
行幸ををがみてよみて奉る

黒石神社祠官兼戸長　唐牛　擔

かしこさのあまりかしこさいへとつきし外の浜までみゆきありしを
加藤重郷　士族
千早ふる神代よりしも大君のかかるみゆきや松島の浦
松島の松の緑を大きみのさかゆくみよの色とこそみめ
みちのくのみゆきの道のたみくさに恵の露のかかる嬉しさ
北村禮次郎　三戸駅
大御世の恵の露の深ければみちのおくまでしげる民くさ
小保内定身　福岡村農
まつろはぬ昔にかへて山川もけふのみゆきになびかぬはなし
昔よりためしもあらぬみちのくのけふのみゆきにあふぞ嬉しき
小保内孫陸　同上
大君は神にしませばかしこしとみゆきをがまぬ人なかりけり
国分喜惣治　同上
ときはなる葉も一しほの色そへて行幸待なり末の松山
橋本八右衛門　八戸町
あまつひのみかげ尊きみゆきこそくもりなき世のしるし成けれ
橋本本八　三日町
高き屋の昔おぼえてみちのくの民のかまどにたつ烟りかな
御車のいたらぬかたも大君のみかげにもるる里なかりけり
橋本理宇吉　八戸町
古しへにたぐひもあらぬみちのくのけふのみゆきにあふが嬉しさ
關野長右衛門　同上　八十五年
鳳輦のみゆきにあひて埋れし名をこそおこせ壺のいしふみ
青森県少属　山崎弓雄
思ひきや末の松山なみならで大御車のこえむものとは

いはき山いはねの松の千代かけて例しあらめやけふのみゆきは

浦山太郎兵衛　八戸町

陸奥を国の果とし歎きしをけふのみゆきに逢にけるかな

こたび陸奥の国々に、行幸ましまして、此青森県青森港にしばし大御車をとどめさせ給ふ、臣繁禎此県なる第三大区々長となりて、今此時にあひ奉りぬ、よりて三大区なる人草凡七万四千五百四十人あまりにかはりて、かしこくも行宮に祝詞をささげたてまつる、

三大区々長　大道寺繁禎

天皇尊、天津日嗣継がせ給ひしよりやがて大御政事いにしへにかへし、その世にふさはしからぬをおきてよろしきに改め玉ひ、上は天津御祖をはじめ、天つ神国つ社を崇めまつり、下は千萬のおほみたからをなんあはれみ給ひける、かくて皇国のみち、いやますますにひろめ給ひ、とつ国の学びをさへにまなばしめ給ひて、世の人の玉しひをみがかせたまひ、万のわざを開かせ給ふ、大御いつくしみは、四方の海にあふれたまひ、大御稜威は遠つこと国にかがやかせ給ひき、しかあるに、をとつとしはるばる西の国に行幸ましまし給ひしに、ことしはまた土さくばかり堪かたき暑さをもいとはせ給はで、すずしき玉のおまし所をはなれさせ給ひ、東のはてなる遠き青森県になん大御輦をめくらし給ひける、いでや其大御よそほひををろがみ奉らんと、老も若きも、男も、女も、野におわしき、道にひれふして、歓びまをす声、大空をひびかすばかりなるは、日でりに雨のふるごとく、闇夜にともし火を得たるが如く、嬉しともうれしくこそ、かれは今よりは大御光をおひまつり、大御恵にうる出ひて、ふみならふ学びの道はいやすすみにすすみ、万のなりはひすいや開けにひらけて栄えにさかえまさむことは、いちじろきわざ成けり、されば今この港より大御船の、とも綱とき放ち艫綱ときはなちて、いでまし給ふらん、蒼海原のしほの八百重風静かに波平らかにして、すみやけく、都に津かせ給ひて、宝祚は、天地とともに極みなく、大みいのちは、万世に八百万世に、おはしませと、寿詞まをし侍るは、かしこしともかしこきわざなりや、

御車のめぐるまにまに開けゆく道にあゆみもすすむべきかな

青森の里にて鳳輦ををがみ奉りて

御くるまの静にめぐるみちのべの塵吹はらへ外の浜風

くらべ馬をみそなはし玉へるを

大君のみまへにしあれば圧をせと駒も先をやかけてきそひし

浦波にひびきあはせてあら駒のかける蹄の音ぞ雄々しき

箱館

詠行幸歌

副戸長　矢本直十郎

御恵みのあつしの衣きるたみもけふのみゆきにあふが嬉しさ

北の海よりくる波のあら磯に御船こかむとおもひかけきや

神宮禰宜大講義　七里正泰　函館詰

いでましの恵みの露に民くさはいよよしげらん北のうみつ路

開拓中主典　野田太吉

音にのみききしみゆきを天ざかるひなのをじまにけふ拝むかな

例しなきけふの御幸に村ぎもの心開くる箱だてのさと

神宮補教六等講　大橋益城

あら波のよする島わのいでましになびくかひある玉もおきつも

開拓少主典　大橋廣高

高光るわが日の皇子のいでましに北の海道もいよよ開けむ

大きみの恵みあつしの衣きてしづも行幸を拝むかしこさ

駅遞少属　上村山省　函館詰

北のうみのみゆきもしらでいたづらによるとし波を歎きけるかな

郷社山上大神宮祠官兼権少講義　澤邉徳幸

あまつ水あふぎて待し大君のみゆきをけふときくが嬉しさ
大君のみゆきを松の下かげに露の恵みのかかるたみくさ

権少講義　槙山淳道

天ざかるひなの果なる箱館にみゆきあらんと思ひかけきや

教導職試補　澤邉　幹

天ざかるひな人われも時にあひてけふのみゆきを拝みけるかな
掛巻もあやにかしこき大君のみゆきのつらを拝むけふかな

同上　小野大助

思ひきやひなの浦わに住ながら君のみゆきをあふぎみむとは
北の海の山の草木もけふよりは君が御幸に色やそふらむ

多久佐里高喜　岩手県士族　函館寄留

かしこしな百敷にます大君の北のうみべにいでまさむとは

牧田子友　弁天町平民

天の戸のひらけゆく世の大行幸たかきみかげをあふぐけふかな
掛まくもかしこき君の行幸こそくまなくてらす日影成けれ

牧田藤五郎　同上

思ひきや北の海路に白波のかかるみゆきを拝むべしとは
くれは鳥あやにかしこきいでましを繰返しつつ見るよしもがな

登茂子　牧田藤五郎妻

嬉しさをなににたとへむ大君のおほみくるまをひなにむかへて
北のうみや開けし御世の初みゆき何とたとへん言のはもなし

菊池政春　佐渡国松ヶ崎村医函館寄留

八隅しし君のみゆきにしづまりて北の海路は波風もなし

梅本祐齋　大工町平民　医

みゆきます君がよはひの長かれど鶴にならひて舞ふか蝦夷人

これは箱館に御車とめさせ給ひけるほと、拝みに、いでたる蝦夷人らをめして、大みき賜ひける時、其よろこびますとて男女かたわきて舞かなでけり。其さま鶴の翅広げたらむゆうにみゆれば、これを名づけてつるの舞とはいふなる。昔より蝦夷人らに酒のますれば、其よろこびにしかするならひなりといへば、かくはよめりしならむ。

柳田新五郎　大黒町平民

天地の開けてしより箱館にためしもきかぬ大みゆきかな
大君の恵みもあつきひのみゆき氷の海もとけやわたらん

佐々木一郎　佐渡国後山村

心にもあらでをしまによりきしもけふのみゆきにあはむとてこそ

佐々木左中　同上

くもりなきやたの鏡のうつしみのみかげをけふはあふぎけるかな
賤がみにあまりぬるかな大君のみゆきをあふぐこの嬉しさは

御巡幸ををがみ奉りて

狐山堂無外　函館平民

あまつひの光りにもれぬ賤のをがかたじけなさぞみにあまりける

二宮元實　籍未詳

あまつひの光りあまねきみゆきをばあふがざらめやえぞが千島も

四倉幹太郎　同上

数ならぬ蝦夷が千島の小草まで恵みの露にもれぬみよかな

附録

行幸を祝ひ奉りて

大泉眞澄

天つ風ふく敷島のみちのくになべてぞなびく四方の民くさ

道山三次郎

御輦の御さき清めてふる雨の晴ゆく空をあふぐもろ人

作者不知

大君のしるしの御旗朝霧のひまにかがやくみちのくの里

天ざかる鄙の山路のみゆきにぞいや開けゆくみちのくの里

松濤

豊なるみよや早苗に日のめぐみ

三浦荘七

君が代に住ながらへてあればこそ大みはたてを拝むなりけれ

大場義雄

治まれる世にながらへてかしこくも君のみゆきにあふぞ嬉しき

久かたの天つみそらは遠けれどめぐる月日のかげのさやけさ

稲沢衡直

うちひさす都に遠きみちのくのけふのみゆきにあふぞ嬉しき

日野亮官

大御代の光りもいとどますかがみくもらぬかげをあふがざらめや

埋木の花のなれりけるをよろこびておのおのよめる歌

右大臣　岩倉具視

埋木も花さく御世と成にけり黄金もいまや実を結ぶらん

内閣顧問　木戸孝允

君をおもひ民をあはれむ真心の花は散よもあらじとぞ思ふ

議官兼二等侍講　福羽美静

うもれ木の花咲みれば何事もならぬことなき君が御代かな

宮内卿　徳大寺實則

繰返し君みそなはせ民草のめぐらにもるる里もありやと

宮内大輔　萬里小路博房

名取川せぜの埋木顕れて花さくみよにあふぞうれしき

侍従長　東久世通禧

みちのくの道もすがらに手折こし詞の花は散べくもなし

宮内少輔　杉孫七郎

なとり川せぜの埋木君が代に花さきにけりあはれ埋木

従一位　中山忠能

みちのくの尾花か袖の末までも恵みの露はおきあまりけり

従一位　徳川慶勝

陸奥のそとの浜辺のあまの子ももれぬ恵みの波にぬれけむ

正二位　三條西季知

君を思ふ其人毎の真ごころも先ことの葉の花にみえつつ

正二位　松平慶永

君が代にあぶくま川の埋木も顕れてこそ花さきにけれ

従二位　嵯峨實愛

みゆきしてみちのおくまでへだてなく民のこころをとふの菅ごも

従二位　大原重徳

大君の行幸まちえて民草の心の花ぞさき出にける

従二位　伊達宗城

いでましの恵みの露のおきそひて千代もくちをし民の言の葉

従二位　池田慶徳

みちのくにうづもれはてし埋木も君が恵みに花ぞさきける

従三位　毛利元徳

いでましの大みひよりにうもれ木の花もよにこそ匂ひ出けれ

従三位　池田茂政

名取川せぜのうもれ木時をえて花さくみよにあふぞ嬉しき

従三位　亀井茲監

大君のみゆきいはひて岩木山高きみかげをあふぐ民くさ

宮内大丞　香川敬三

ためしなきみゆき待えてみちのくの埋木だにも花さきにけり

三等侍講　元田永孚

紀元二千五百卅六年、維六月初吉之天、我皇肇啓東幸駕、六龍御風旭旗翩、神武邈牟景行遠、巡守之典闃不傳、一自王政墜覇治、為民父母安在焉、我皇睿聖不世出、一転萬古乾坤旋、勅曰民是朕赤子、赤子徯予眞可憐、台征韓和外既定、今歳且自東奥先、奥山青連羽山紫、輦路週遭雲又水、大窪先導木戸従、右相在前卿輔尾、自餘股肱皆豪俊、欲宣徳化治邇邇、朝臨縣庭問民苦、夕召官吏聞政理、賞功慰勞兼嘉志、旌孝揭節更尚歯、絃誦琅々天聴悦、耕織勤勤龍顔喜、満⊠桑樹繭上場、千羣雲錦馬集市、遍探遺蹟表隠逸、追懐千烈録孫子、仁及走獣可感神、恩至枯骨甚泣鬼、二千里内只春風、草木皆在甘雨裡、沿道篋篚争相迎、風籟禽語総頌聲、烝黎齊獻康哉歌、芻蕘共陳来蘓情、至尊優詔賜採録、擬和宮徴験化成、往登南岳跨北海、謳歌八埏共歓榮、白頭陋儒辱寵握、目撃盛事感聖明、雖乏吉甫班固技、非無螻蟻葵藿誠、只願明治東巡頌、々中得列老臣名、

典　侍　四辻清子

埋木のうづもれし名も顕れて君がみゆきに花さきにけり

典　侍　高倉壽子

みちのくの民の草葉もしげるらん恵みの露のかかるみゆきに

侍従番長　高崎正風

君が世のさかりしられて陸奥のあら野の末に文の花さく

権典侍　柳原愛子

大君のみゆき待えて吹風もなこその関になびく民くさ

権典侍　植松務子

白川は君のみゆきの影みえて濁りし水のあとだにもなし

侍　従　堀河康隆

陸奥のあだだら信夫いはて山かひあるみよにあひにけるかな

侍　従　富小路敬直

かつみのみ人のいふなるみちのくの浅香の沼に玉も花さく

侍　従　西四辻公業

みちのくのあぶくま川にたつ波の花こそさけれせぜのうもれ木

侍　従　山口正定

東奥新呈幾許詞、知無處不頌明時、君臣際会豈徒爾、両巻長存萬世規、

侍　従　仙石政固

集中才子可憐生、埋木得春花始榮、従是東陬風雅遍、不教京洛擅文名、

侍　従　鍋島直彬

炊煙稠否帝憂頻、車駕東方更一巡、問疾賑貧憐困獨、慰勞旌績勤良民、仁風遍及普天下、恩露齊霑率度濱、父老歓迎要大路、頌歌争唱萬年春、

掌　侍　石山輝子

大みよに生るるだにもかしこきをかかるみゆきにあへる民かな

権掌侍　唐橋貞子

大みよの民の為とや玉鉾の道のおくまでみゆきましけむ

権掌侍　千種任子

あまのこも君がみゆきを松島のまつにかひある時や知らむ

権掌侍　壬生廣子

大君のみゆき待えて名取川名もあらはるる瀬々の埋木

権掌侍　税所敦子

松島のあまのかるもも萬代にくちせぬものとなれるみよかな

権掌侍　樹下範子

あらはるる時も有りけりみちのくのいはての山のたにのうもれ木
皇学御用掛　近藤芳樹

あら野のみおぼしときなりみちのくにかかる言葉の花も咲けり
命　婦　三上文子

宮城野の草の葉末もおく露の深き恵みにもれぬみよかな
命　婦　堀川武子

ためしなき君がみゆきを松島の松も千よべしかひは有けり
命　婦　鴨脚朝子（モト）

陸奥のひなのわらべも天つ日のかげをさやかにあふく御代かな
権命婦　鳥居大路應子（アサ）

みちのくの松が浦島うらやすのみよをちとせとうたふたづかな
権命婦　西　西子（サイ）

白波のかかるみゆきのかしこさをいま一たびとまつが浦島
権命婦　吉田艶子（ツヤ）

大君のみゆきを待てみちのくのたみの草葉もなびくみよかな
権命婦　平尾歌子

よろこびのまゆもことしは開くらん広き桑野のかげを仰ぎて
宮内省九等出仕　藤波言忠

ことしよりみちのく山の言の葉の花もさかりにならむとすらむ
宮内省十等出仕　渡　忠秋

あまつ日のめぐる御かげに言の葉のみちのおくさへ開けつるかな
雑　掌　松波資之

久方の雲のうへまで匂ひけりみちのおくなる埋木の花
雑　掌　高見　忠

いかばかり嬉しかるらんうづもれし草木もみよの寿にあひつつ
雑　掌　阪本　直

天つ日の光りあまねきみよにあひてよに埋木の花も咲けり
宮内少録　根本承弼

幸遭仁風恩露新、奄看埋木再生春、更欽天上垂餘澤、不遣此花飛作塵、
宮内省十二等出仕　高柳秀成

あさか山あさき言葉に山の井の深きめぐみぞくみてしらるる
宮内省十二等出仕　成瀬久太郎

千とせへしあぶくま川の埋木もめぐみのなみにうかび出けむ
歌道御用掛　松平忠敏

咲出てみけしの袖にかをりけりあぶくま川の埋木の花
歌道御用掛　力石重遠

君が代はみちのく山に黄金なす言葉の花も匂ひ出つつ
皇学御用掛附属　安部眞貞

奈良の葉の、名におふ宮に、天の下、しろしめしける、天皇の、御世栄えむと、あづまなる、陸奥山に、こがねこそ、はな咲にけれ、ひむかしの、都に坐して、初国を、しろしめしける、天皇の、行幸かしこみ、東なる、みちのく人は、言の葉に、花をさかせて、古への、金の花を、皇辺に、貢しごとく、今の世の、言葉の花も、朝廷辺に、ささげまつるは、安達野の、鬼あざみなす、ひなびたる、言の葉ならで、宮城野の、姫百合の如、みやびたる、言の葉なれば、いまだみね、浅香の沼も、花かつみ、かつみるごとく、ゆきてみぬ、つつじがをかの、丹つつじも、面影みえつ、名取川、あぶ隈川は、埋木に、川も生ひつつ、埋木に、玉もぞなびく、玉もには、花さき出て、川もにも、花しさければ、あつまれる、みちのく人の、こと葉にも、花さきいづる、君が御代かも、

〔跋〕

うたとは、うたふといふに同じくて、心に思ふ事を、口に訴へ出

る言の葉なり。されば紀貫之の、ひとつこころを種として、よろづの言の葉とぞなれりける、といはれたるが、やがて歌てふ言の義を称ける始めになむありける。そのひとつ心とは何ぞ、時につけをりにふれ、心のうちに結ぼほるる物のあはれをいふなり。そのよろづの言のはとはなにぞ、心のうちに結ぼほれし物のあはれを、いひ出る言のはしなり。むかしのうたに、竹川のはしうち出しひと言に思ふこころのほどはしらなむ、とよめるはしが言の葉のはなり、としるべし。このとぢ書は、こたびみちのくのおほみゆきに、處々より奉りしうたを、侍従番長高崎正風、おほむ側らに侍らひて、輯められたる集にして、さる吾妻のはての静の者どもの、あま雲のよそにのみ聞わたりにしおほみすがたを、まのあたり見奉りて、巌城の山の高き御ひかりを仰ぎ、あぶ隈川の深きみめぐみをよろこび、よみいでひりなせる歌どもなれば、これなむ誠に、ひとつ心のたねよりおひ出たる言の葉とはいひつべき。さるはおほやけにも、御稜威をかがやかしたまはく、過させ給へる路のほど、御輦のとばりをさへあけさせ、けとほからずもてなさせ給へるを、恐みうれしみて、をとこ女は、並木の蔭、芝生のうへに謙りながら、すこしもまぢかくおろがまむ、と互みにあらそひすすみ出るさま、たとへば久しく離りをりしおやに、子のあへるが如くにしありければ、さばかり慕ひ奉れる事のはしを、何にかはあらはしみせたてまつるべき。よけくあしけく言の葉どもの、おほくつどひしはこのゆゑなりけり。あはれ古しへ吉野の国栖が、すめらぎのおほん事を、麻呂が父とまをせるふることども思ひ出られて、かくてきみと民とのあはひも、親しくまことかよひて、めでたかりけれ、とおもふよしを、この集なれりしよろこびの歌の団居のついでに、いひ出たるを、人々うべなひて、けふのふけ、けふのみのことはりにて、出しくつみすてむはあたらし、とそそのかせるるままに、浅香の沼のあさはかにも、ふでをとりをはんぬ。

近藤芳樹